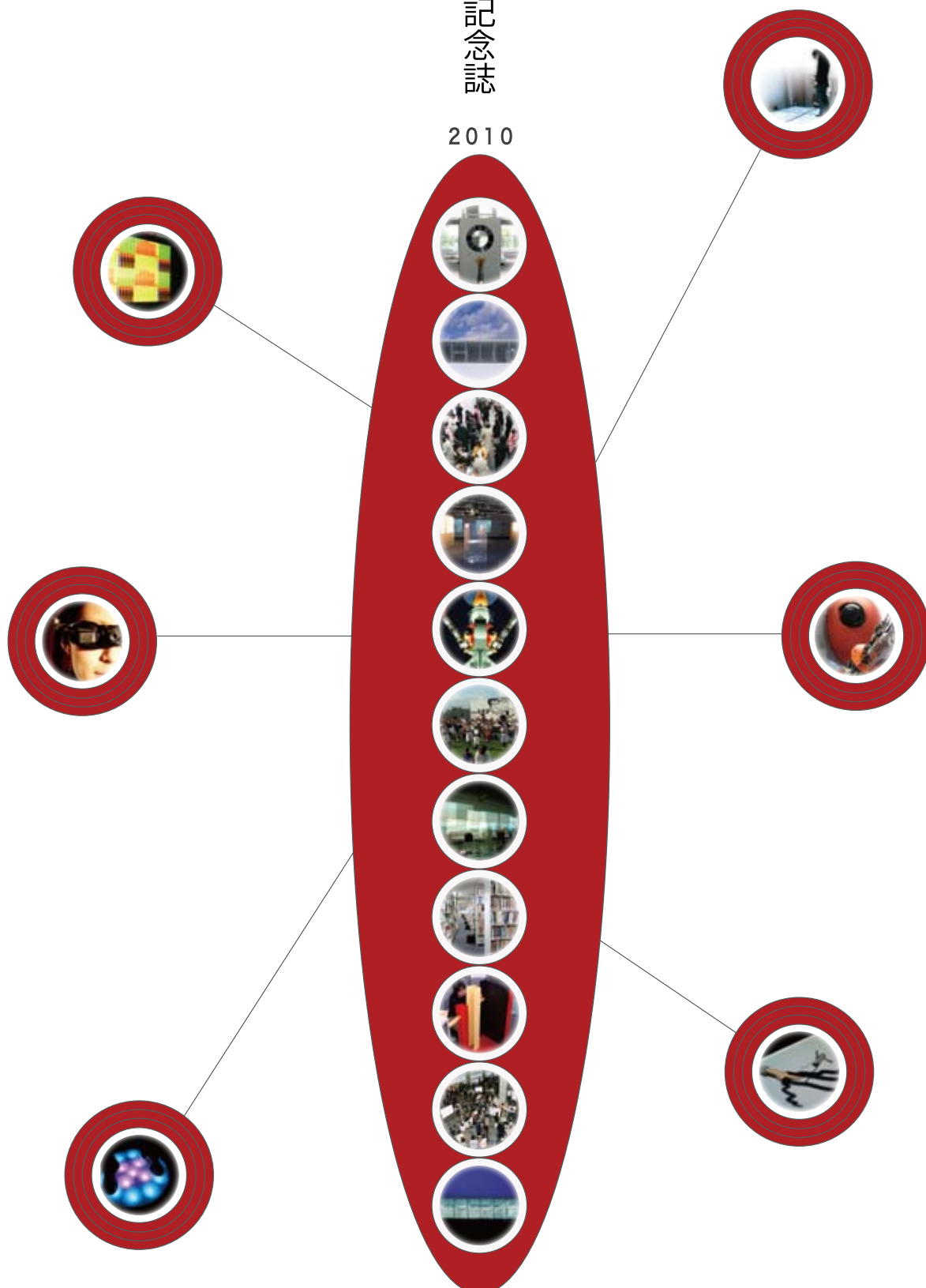




FUTURE UNIVERSITY HAKODATE

開学  
10  
周年記念誌

2010

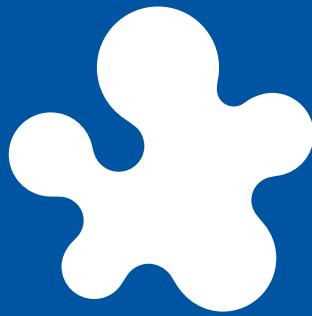


2000



公立はこだて未来大学  
開学10周年記念誌

2000 ▶▶▶▶▶ 2010 ▶▶



## ごあいさつ

公立はこだて未来大学は、開学10周年を迎えました。私は2004年に初代伊東学長の後を引き継ぎ、2代目学長として着任しました。函館は初めての地でしたが、函館という都市の魅力とともに、本学がそのときすでに全国に名前が聞こえる元気な大学だったこと、そしてまだまだ発展途上の可能性を秘めている大学であることが、学長を引き受けるうえで大きな動機となりました。



草創期に尽力された初代学長や教職員の方々、新設大学に勇気をもって入学してくださった学生諸君によりすでに築かれていた功績を足がかりに、その後も大学の創成を進めてきました。地域連携・産学連携を推進するための共同研究センターの設立、研究棟の供用開始、秋葉原の東京サテライトオフィスの開設、メタ学習センターの設立、さらには公立大学法人化とそれに続く学科改組など、大学組織としての基盤固めと改革を行ってきました。10周年を迎え、大学はすでに創成期から概成期を経て、次なる発展を目指すべき時期に入っています。今後もさらなる革新的取り組みを続けてまいります。

現在、厳しい就職状況の中でも本学は99%を超える高い就職率を維持しており、これもひとえに独自の教育方針を追求し続けた教職員の熱意と、それに応えてくれた学生諸君の努力の賜物と感謝しております。また開学の年に入学した学生の中からは、博士後期課程を修了し、研究者・教育者の卵として活躍を始めた方々も出ておられます。大学院設置から7年を経て、本学も大学から大学院までのすべての教育課程の体制が整ったといえます。

本学がこのように基本的な基盤整備を終えることができた今、地域に根ざした大学として、人財と知恵を創出し、今後とも重要な働きをなしていくためには、10周年を機にこれまで我々が行ってきたことをまとめ、未来への礎とすることに大きな意義があるのではないかと考え、このたび本記念誌を刊行する運びとなりました。

2010年6月には、開学10周年記念式典も無事に執り行うことができました。函館圏公立大学広域連合長をはじめ、地域の皆様、後援会や同窓会など多くの方々のご列席をいただき、改めてたくさんの人達にこの大学を支えていただいていることを実感いたしました。この場を借りて心より感謝を申し上げます。

公立大学法人 公立はこだて未来大学 理事長・学長

中島 秀之

## 開学10周年に寄せて

公立はこだて未来大学は、高度情報化社会に対応する豊かな人間性を備えた創造性の高い人材を育成するとともに、地域における就学機会の拡大、研究開発機能の強化、高次都市機能の充実などの課題に対応するため、当時の函館市と上磯町、大野町、七飯町、戸井町の1市4町（市町村合併により現在は、函館市、北斗市、七飯町の2市1町）で構成する函館圏公立大学広域連合が設置する大学として、平成12年（2000年）4月に開学し、平成20年（2008年）4月に法人化されました。



この大学が開学するまでに、当地域においては長年にわたる国立大学誘致運動をはじめ、広中平祐氏が提唱された湧源大学構想など、大学設置に関し多くの取り組みが行われ、平成6年（1994年）に国立大学誘致が難しい中で、当時の函館市長木戸浦隆一氏が「地域自らが主体的に構想した大学設置を目指す」との決断をしたことが、この大学づくりの始まりとなりました。

爾来、大学設置に向けて、地域が一丸となって取り組んだ結果、新しい時代にふさわしい魅力ある公立大学が誕生したものであり、大学づくりに取り組まれた当時の関係者の情熱に思いを馳せる時、改めて、この大学を地域の宝として、大きく育んでいくことが我々に課せられた責務であると痛感するものがあります。

開学以来、公立はこだて未来大学は、北海道をはじめ圏域の自治体や経済界、さらには地域住民の方々の厚いご支援とご協力をいただきながら、教育研究機関として、高度情報社会に対応する豊かな人間性を備えた創造性の高い人材を育成するとともに、教育・文化活動や産学官連携などにより、地域の発展に大きく貢献してきております。

特に、熱心な教員の方々のご指導と全国各地から集った学生達のひたむきな努力によって、様々な活動が地域に大きな波及効果をもたらしており、開放的な環境で、先進的な教育研究に取り組む未来志向の大学として、全国の大学、自治体、企業の関係者などから大いに注目されております。

我が国の社会環境が大きく変化している中で、公立はこだて未来大学に期待される場所は極めて大きなものがありますので、これからもこの大学が未来を見据え、活力に溢れる人間を育み、人類のさまざまな課題に挑戦する知識と知恵を創造し、地域はもとより我が国と世界の繁栄に貢献されることを期待しております。

函館圏公立大学広域連合 広域連合長

西尾 正範

## 街に飛び出す学生たち

未来大学ができてからというもの、学生が課外活動やプロジェクト学習などをきっかけとして学外に足を運ぶ機会が増え、その風習と文化が函館の街に根付きました。函館に住む人たちは「待っていました!」といわんばかりに学生たちを必死で（もしくは無意識に?）サポートしてくれます。それが函館という街の魅力です。学生生活を過ごすには街のサイズも手頃で、自分の立ち位置をしっかりと見定めることができます。

街は「人」がいて初めて成り立ちます。人が成長し続ければ街は同時に成長します。学生が街に繰り出すことで街の人たちの心を成長させ、学生も一緒に成長します。街のランドマークである函館山と、街をはさんでその真向かいに立地する未来大学。互いが見守り合って、日々学生と街を支えています。

「未来」は自分で切り開くもの、そして成長し続けるもの! 名前はその存在を示すもの。だからこそ MIRAI-UNIVERSITY なのです。



仙石 智義

公立はこだて未来大学同窓会 会長  
(1期生/有限会社ビットアンドインク勤務、NPO 法人函館市青年サークル協議会副理事長)

## いつまでも醒めない 「熱」



「鉄は熱いうちに打て!」という諺があるが、「鉄」が「大学」だとしたら、「熱」は何になるだろう。「熱」はそのまま、学生たちの「熱」だ。10周年を迎えた我が大学はまだまだ若く、熱によってどんどん打たれ、成長している。熱い鉄は柔軟に学生たちの熱を受け止め、また、熱を学生たちに送り続ける。その熱は卒業してもいまだに薄れていない。同窓会で集まると、「大学大好き! 何かしたい! 何かできないか!」そんな思いで溢れている。

妻はそんな同窓会の集まりを見学した際、「こんな大学なら息子を通わせてもいいかもね」と1歳の息子に大学案内を読ませていた。息子が大学生になるときは、大学にも「鋼」のように硬い伝統と絆もできているだろう。しかし、その一方で熱い「鉄」の部分を残し、息子を含め学生たちには熱くしてほしい。息子が18歳になったとき、もちろん47歳の自分も父親として、先輩として熱くいたいものである。

東出 満

公立はこだて未来大学同窓会 関東支部長  
(1期生/株式会社エスイーシー勤務)

## 「化けましよう」への思い

私のあだ名は「化けましよう」だそう。そうですね。特に1期生には強く訴えた。私自身が「化けたかった」。たった一度の人生じゃないか。一生を同じ人間で生きてはつまらない。「生まれ変わったら、こうなりたい」ではなくて、現実「生まれ変わる」のだ。松田聖子ちゃんがアイドルになってスターに化けた。未来大学が新しく生まれ、そこに君たちは入った。君たちが化けるときに大学も化ける。大学が化ければ君たちも化ける。私も化ける。「一緒に化けましよう」と最初の入学式で学生たちに呼びかけた。

反応は期待以上に強かった。最初の学園祭のテーマが「化けましよう。」「…ですよね。」「…」をつけたのが正直でいいな。そんなかざらぬ学生たちをますます好きになった。嬉しいのは、ときどき学生が学長室に飛び込んできて、「先生！私、化けました。家族からも、高校の友人たちからも、お前変わったと言われるんです」。そんな学生が一人や二人ではなかった。

そして、先日は卒業生たちの座談会でこの「化けましよう」が話題の中心になった。皆、見事に化けている。大笑いしたのは、K君が「俺は日本一のSEになると決意して勉強していた。そしたらこの4月に上からお前は人事にまわれ、と命じられた。どうやら新人研修会で新人を研修したときの意気込みが評価されたらしい」。K君なら、さもあらん。見事に化けた。きっと会社も化けるよ。

私も化けた。神戸大学にいたときには研究一筋の学者馬鹿だった。教育も好きでなかった。変わりだしたのは未来大学の設置に関わり出した定年前最後の年からである。学生が「先生の授業、分かりやすくなりました」。同僚から「お前、最後になってプレゼンがうまくなったな。もったいない」と言われた。

学長になって地域の人たち、先生たち、学生たちとつきあうなかで、コミュニケーションの面白さ、楽しさを感じるようになった。神戸大学では逃げまわっていた大学運営に夢中になった。新しいコトをする(Challenge)ために、周囲の人たちと語り合い(Communicate)、一緒に創り出す(Create)。「化けましよう」と並んでうったえた「3つのC」である。

皆さんのお陰で、私の人生はその前よりもずっと広く深くなった。大学と一緒に、学生諸君と一緒に、私も化けた。人間、60を過ぎても70を過ぎても、化けられる。私のブログの冒頭にはこうある。“Old soldiers, never just fade away. Keep being ambitious!”。



**伊東 敬祐**

公立はこだて未来大学 初代学長・名誉教授  
神戸大学名誉教授

---

公立はこだて未来大学 開学10周年記念誌

|    |                                          |    |
|----|------------------------------------------|----|
| 目次 | ごあいさつ 中島秀之 公立大学法人公立はこだて未来大学 理事長・学長       | 2  |
|    | 開学10周年に寄せて 西尾正範 函館圏公立大学広域連合 広域連合長        | 3  |
|    | 開学10周年への祝辞 卒業生代表                         | 4  |
|    | 伊東敬祐 初代学長                                | 5  |
|    | Part 1 Fun's History 地域に根ざした未来志向の大学として   | 7  |
|    | 大学設立までの経緯                                | 8  |
|    | 校舎設計～着工・竣工へ                              | 12 |
|    | 開学～創成期（2000 ▶ 2003）                      | 16 |
|    | 概成期～大学法人化へ（2004 ▶ 2009）                  | 22 |
|    | コラム●シンボルマーク                              | 15 |
|    | コラム●情報通信環境                               | 21 |
|    | Part 2 Fun's Identity 科学技術×人間×社会の未来を創成する | 29 |
|    | システム情報科学——新しい学術領域の創成                     | 30 |
|    | 「オープンスペース、オープンマインド」という風土                 | 34 |
|    | 地域との連携、社会との連携                            | 40 |
|    | Part 3 Fun's Generation 卒業生《1期生＋2期生》座談会  | 47 |
|    | 卒業生の目で振り返る「大学創成期」                        |    |
|    | 資料編                                      | 57 |

Part 1 Fun's History

# 地域に根ざした 未来志向の大学として



## 大学設立までの経緯



公立はこだて未来大学は、2000年4月に開学し、2010年に10周年を迎えました。少子化が進み、定員割れを起こす大学が出現し、国公立大学の統廃合が起ころうとする時代のなかで、加えて地方の財政難にもかかわらず、新設大学は未来へのスタートを切りました。こうした逆風のなか、なぜ大学設置を実現させるに至ったのでしょうか。

第1に、函館は道南圏の経済的拠点でありながら、地域単独の国立大学がなく、「地元の大学をつくりたい」という悲願にも似た思いのもとで、国立大学の誘致に長年取り組んできた歴史があります。その実現は難しく、1994年に至って断念せざるを得なかったものの、積年の思いは諦められることなく、「なら

ば公立大学を」という動きへと転換しました。

財政面では、大学設置の中心となった函館市は、公共施設等の整備のために基金を積み立てており、その中から大学設置のための資金を準備することができました。また大学設置に先んじて1998年11月に設立された財団法人南北海道学術振興財団や、大学の設置にあたって、地域の方々からの寄附が多数集まり、大学に対する地元からの期待の高さがうかがわれました。

第2に、こうした期待に応えるに足る、逆風にも負けない大学の構想が練り上げられる必要がありました。函館市長木戸浦隆一氏のもと、1995年8月に函館市大学設置検討委員会が設置され、民間シンクタンクがこれを

受けて基本案をまとめ、1996年4月には、「函館市大学設置基本構想案」として学年定員240名の情報科学系の大学という骨格が定まります。その背景として、当時の国（文部省）の方針として、国公立大学の学部として設置認可されるのは、情報系、看護・福祉系、国際・政策系という3つの枠に限られるという制約があったということと、函館地域には、当時の通産省のテクノポリス構想にならってテクノパークを整備し、企業誘致や産業振興を図っていこうという構想があり、そこに情報系大学の立地が加わることで、地域の優位性を高めるというねらいもありました。



敷地の造成開始（上：1998年5月、下：同年6月）

\* 計画策定専門委員会（1996.9～2000.3）は、（仮称）函館公立大学開学準備委員会（佐野博敏委員長）の下部組織として具体案の策定と推進を担った。計画策定専門委員会（広中平祐委員長）の前身となるワーキンググループからのメンバー（所属は着任当時）：広瀬通孝（東京大学）、北野宏明（ソニーコンピュータサイエンス研究所）、高安秀樹（東北大学）、美馬義亮（日本IBM 東京基礎研究所）、秋田純一（東京大学大学院生）、アレックス・トレチャコフ（東北大学）、美馬のゆり（川村学園女子大学）、吉橋昭夫（静岡大学）／アドバイザー：須永剛司（多摩美術大学）、伊東豊雄（建築家）

## 今までにない情報系の大学を

この基本構想案を受けて、当初の学長候補者として期待され、大学設置検討委員会委員を務めた世界的に高名な数学者、広中平祐氏が、1996年4月から若手気鋭の研究者を中心に、のちに計画策定専門委員会となるワーキンググループを組織して、プランの肉付けを進めていきます。当時の情報系新設学部の成功例として、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（以下、慶應SFC）がありました。これを真似るのではなく、超えるものを創るにはどうしたらいいのか——「今までの大学教育にはない」「今までの情報系の学部学科にない」ユニークな大学の方向性が、徹底的に議論され詰められていきました。

最も重要な議論の1つが、「複雑系科学」を、新しい情報系大学の魅力として取り入れることでした。従来、大学院でしか扱われてこなかった複雑系科学を、いかに学部の教育カリキュラムとして展開できるか——この点が、学術的なチャレンジでもあり、また大学設置審査においても最も重要な鍵になると考えられました。また、函館ならではの産学官連携の広がりを見込んで、マリン・バイオロジーと情報系の融合や、「イカ研究所」の構想案などについても議論されました。

「情報デザイン」というコンセプトについても、当時、情報デザイン学科の新設にいち早く着手していた多摩美術大学の担当教員らとも議論の機会を設け、互いの良さを活かした情報デザイン教育のあり方について議論を深めました。こうした議論を通じて、先行する大学とは異なる路線で、より理系のニュアンスに重きをおき、科学と工学をベースにしたうえでデザインやアーキテクチャを考えられる人材づくりが理想だろうと結論づけられました。

教育方法についても、海外の先進事例などにも学びながら、ポートフォリオ、学習フィードバック、セルフ・コミットメント、プロジェクト学習、チームティーチングなど、核となるキーワードは早い段階から取り上げられ、議論が重ねられました。

核となる情報系を、複雑系やデザイン系と関係づけながらどう構成していくかについての議論は、最も時間をかけられたところです。物理学や数学などの基礎教育の重要性から、ロボティクス、生命情報科学など新しい潮流まで、幅広く議論されるなかで、表現芸術系、インテリジェントロボティクス系、コンピュータネットワーク系といった大枠の領域構成案がまとまっていきます。

領域の名称を洗練させていく中で、「情報をどう表現し、どう見せていくのか」という意味を表す「information architect」という言葉に注目し、コンピュータ・アーキテクチャからデザイン、芸術や建築までもを包含してイメージできるということで「情報アーキテクチャ」という言葉が浮上します。「複雑系科学」「情報アーキテクチャ」という2つの柱から「科学」「情報」という言葉が切り出され、そこに「システム論的な視点で情報を科学する」という意味を込めて、「システム情報科学」という名称で全体像を捉えることとなりました。こうした議論をベースに、1996年の末までには、「システム情報科学部」という学部名と、「複雑系科学科」「情報アーキテクチャ学科」という学科名称が決まりました。

じつはこの後、1998年頃から「情報アーキテクチャ」という言葉が世の中に流布し始め、ウェブのデザインや技術に偏った狭い意味合いで使われるようになっていきます。1999年に入って再度議論の末、日本語の学科名はそのままいくが、当初意図していた広い意味



大学全景（2000年4月）

での情報表現やメディアデザインを含んだイメージが伝わるよう、英語名称は「media architecture」とすることとなりました。日本語名と英語名が異なるのには、こうした事情があったのです。

## 逆風から追い風へ

1997年5月には、「2000年4月開学」という目標スケジュールも定まります。大学設置に向けて、当時の函館市、上磯町、大野町、七飯町、戸井町の1市4町が「公立大学関係市町村首長会議」を設置、その後11月にはこの1市4町により函館圏公立大学広域連合が設置され、「(仮称)函館公立大学基本計画」が決定されました。

1997～98年は個別の分科会を順次立ち上げるなどして、具体的な開学準備作業に入っていきます。4年間の学生生活と成長段階についてのイメージを描きながら、個々の科目とそのシラバスの作成などの作業も詰められ



上：プレゼンテーションベイ  
下：オープンスペースに設置されたテーブル

ていきました。教員の人選も始められます。若い有能な人材をできるだけ多く、また企業の研究者出身の人もできるだけ多くと、設置審査基準のぎりぎりのラインとせめぎ合いながら、多彩な教員構成が目指されました。

大学名称についても、仮称とされてきた函館公立大学をベースに、様々な案が検討されます。1998年2月から3月末にかけて、大学名称の公募を実施し、たくさんの応募がありました。1つに絞り込むには至らず、い

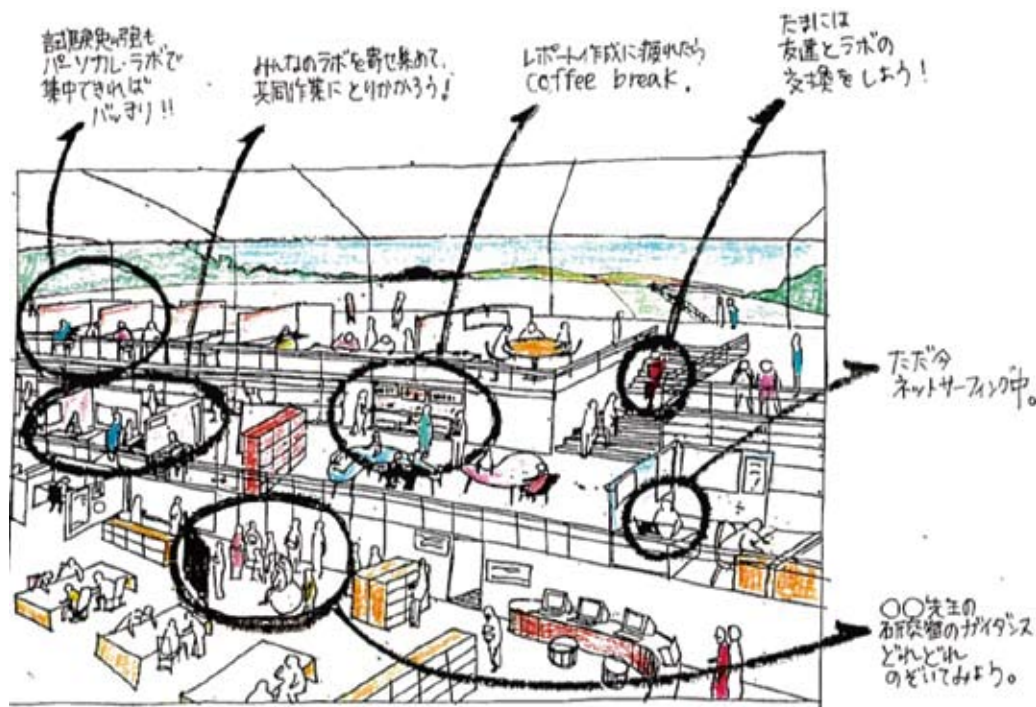
くつかの案を融合するかたちで最終的な名称を練り上げていきました。複数の自治体の広域連合による公立大学ということから、函館市を連想させる漢字表記ではなく「はこだて」とすること、工科大学や情報大学といった特定の分野を連想させる言葉よりは、可能性の広がりをもった名称をとということで「未来大学」が選ばれました。

こうして1998年6月には「公立はこだて未来大学」という大学名称が正式に公表され、メディアでも話題が取り上げられるようになっていきます。さらに1998年10月に出された大学審議会の『21世紀の大学像と今後の改革方針についての答申』では、それまでに議論されてきた斬新なアイデアが肯定されるような方向性が示され、大学への追い風が吹き始めます。先例のないものばかりで、文部省からつき返されるのではないかと懸念されていた大学構想ですが、結果的には当初予想していたよりもずっとスムーズに設置認可されました。

開学を1年後に控えた1999年4月には、教員着任予定者を集めて、1泊2日の合宿を実施しました。新しい大学の内容を説明するとともに、プロジェクト学習と称する独自の実習科目についての具体的なアイデア出しや、担当科目の分担のためのディスカッションを行うなど、単なる説明会ではない、今後の開学準備作業へ実際に参加してもらうための本格的なワークショップを行いました。

この頃から、初代学長に内定した伊東敬祐と、計画策定専門委員会のメンバーだった美馬義亮（現・准教授）は、いち早く函館へ居住を移し、広域連合事務局とともに高校訪問に精力的に取り組み、「大学とともに、あなたも化けましょう」のメッセージを掲げて、受験者へのアピールに努めました。

## 校舎設計～着工・竣工へ



空間設計については、1996年7月のワーキンググループから、当時、革新的なコンセプトで話題を集めながら実施設計段階に入っていた公共施設「せんだいメディアテーク」の設計者である建築家の伊東豊雄氏をアドバイザーとして招へいし、空間設計の方向性についての議論が本格的に始められました。

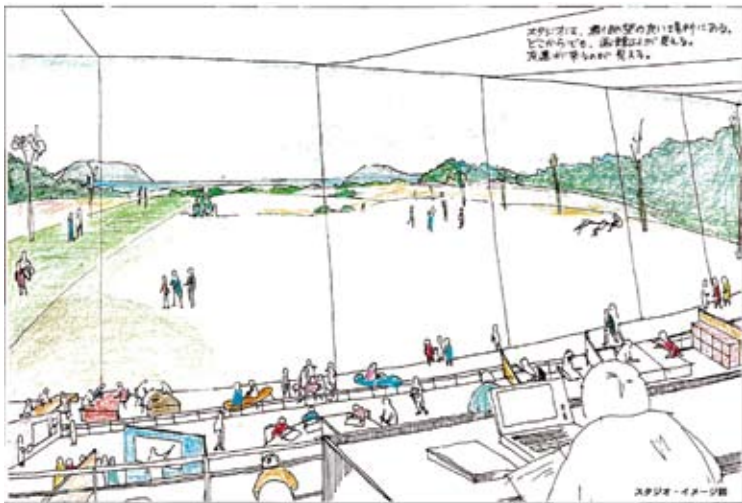
大学の建築物の中では、教育や研究に関連した様々な活動が、日々生まれています。しかし、大学の中で面白いことが起こっていても、その面白さを伝え合うことができるような設計がなされたものは少なく、多くの大学の建物を見ると、残念ながら閉じた空間の集まりとなってしまっているものが大部分という状況でした。

本学の計画においては、学内での活動を互いの刺激とし合い、分野を超えた相乗効果を生むことを目指した新しい大学として、建物自体がその機能の一端を担うべきだと考えら

れました。伝統的な大学の建物の形状にとらわれず、大学の中で起きていることが手に取るようにわかる機能をもつ建築物のあり方が模索されるとともに、函館湾を一望する丘陵地という立地を生かし、外にも内にも明るく見通しのよい建物という要望が立てられました。こうした条件から、壁を取り払ったフリースペースに重きをおく「オープンプラン」といわれるスタイルが、大学の理念を具現化するうえでも、活動を機能的なものにしていくうえでも重要であることが確認され、本学の空間を特徴づける中心的な核として位置づけられました。

### オープンプランにもとづく大空間

基本コンセプトの策定と並行して、具体的にどのような方法で業者を選定し、設計や建築を実施していくべきかが模索されまし



左頁・上：初期のスケッチ（山本理顕設計工場提供）  
下：完成したスタジオ

た。伊東豊雄氏からは、広島市の公共施設などですでに実績のあるマスターアーキテクト方式（監修的な役割を果たす人を指

名し、その下で複数の建築家がチームを組む）が紹介されましたが、公共施設に指名制を導入することが難しく、最終的にはプロポーザル方式（複数の実績ある業者が企画提案を出し、委員会で審査・検討する）によるコンペティションを実施することが決まりました。すでにアドバイザーとして計画にかかわっていた伊東豊雄氏には、選考委員会の委員をお願いすることとしました。

1997年2月、建築・造成の設計コンペに16チームが企画を提出。審査の結果、(株)山本理顕設計工場・アジア航測(株)共同体の設計案が選定されました。最初の案はあくまで業者選定を目的として、最低限の与件を前提に作られた試案にすぎないため、これを実施設計へ落とし込んでいく作業が早速始まりました。計画策定専門委員会では、国際的な

建築家である山本理顕氏や設計スタッフとのあいだで何度も議論を重ね、模型のスクラップ&ビルドを繰り返し、最終的に高さが約20メートル、幅が約100メートルもある、大空間のプランが提示されました。

この大空間は、あちこちで思い思いに行われる活動がおのずと混じり合い、互いに刺激し合うクリエイティブなスタジオを構成していくように、また学会やロボット競技など大規模なイベント開催会場としての活用も想定して、状況に応じて多目的に使いまわしていけるように、吹き抜けに面した空間は細かく区切るのではなく、必要な設備や什器をフレキシブルに配置できるよう工夫されました。

このオープンなスタジオに面して階段状になった5層のフロアに、教員の研究室を配置することで、スタジオで活動する学生と教員の動線や目線が、広い範囲で常に交錯するような関係を形成しました。逆に、集中できる作業空間が必要な大学院生室や研究実験設備室は研究室の奥に配置し、こちらはクローズドな空間性を持たせることとしました。

さらには、スタジオに面した研究室の壁を、全面透明なガラス張りにするという案が浮上します。「大学教員の研究室はクローズドな個室である」という、世の常識をひっくり返すアイデアです。新しい大学では、教員と学生の間の壁（物理的にも精神的にも）を取り払い、オープンなコミュニケーションを促していくことを優先させよう、ブラインドを取り付け、必要な時に昇降すればよいことにして、この画期的なプランが実現しました。

## 徹底した細部へのこだわり

このほかにも、大学内のどこでもプレゼンテーションやグループワークができるように

したいという議論から、プレゼンテーション専用室は設置せず、「メディアワゴン」と称した、プロジェクタやビデオを搭載した可動式のワゴンを置くなど、新しい大学空間を最大限に活用していく様々なアイデアが生まれ、実現されました。また当時は、語学学習を主目的としたCALL（Computer Assisted Language Learning）教室の導入がブームでしたが、1人1台のコンピュータ端末が整然と並ぶこのスタイルではなく、グループワークやデザインワーク、プレゼンテーションに柔軟に対応できるC&D（Communication & Design）教室と名付けた部屋を設けることにしました。

コンピュータ・システムについてもネットワーク回線や情報コンセントの配置、必要な設備の洗い出しなどが細かく行われました。限られた予算を効果的に使うために、1万点以上の什器についても、実験装置から彫刻刀に至るまでのリストが作成されました。

### 愛着溢れる空間へのネーミング

1998年6月には、設備インテリア委員会が、内装や什器の発注に入ります。ここで、全体をモノトーンでまとめたいたする山本理顕チームと、寒い季節に温かな色合いが必要とする設備インテリア委員会のあいだで意見が分かれていますが、最終的には委員会の意見を通して、カーペットなどにカラフルな色合いが選択されていくことになります。

1998年10月、校舎建築工事に着工。開学まであと2ヵ月と迫った2000年1月31日、ようやく竣工します。

完成を待つ間には、建物内の施設のネーミングも議論されました。階段形式の講堂を「kujira」、工房やマック教室など目的別の



上：最初の柱が立ち上がる  
（1999年4月5日）  
中：林立する柱（同年5月）  
下：スタジオ内部の大空間  
（同年7月）  
（写真提供：山本理顕  
設計工場）

ショップが立ち並ぶ中央廊下を「モール」、丸く階段状に切った多目的スペースを「プレゼンテーションベイ」と名付けるなどのこだわりも発揮されました。これらの名称は、学生にも教職員にも、今日まで愛着をもって使われてきています。

こうして創られた空間は、2002年日本建築学会賞作品賞や第9回公共建築賞（国土交通大臣表彰：2004年）など、数々の賞を受賞しています。

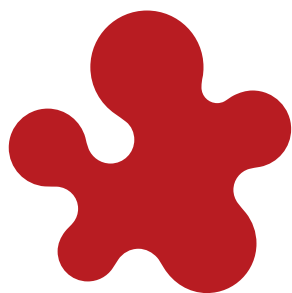
# 大学のシンボルマークは、

未来へ増殖していく限りない知識とエネルギーを表す

大きさの異なる5つの円形で構成されています。

これらは、人間・科学・情報・文化・自然をバランス良く融合させた、

優れた人材の育成を目指すことを表します。



シンボルマーク・デザインは、1999年4月よりデザインの専門知識をもった教員予定者を中心にしたUI（University Identity）委員会で開発を始めました。大学の設立理念にもとづく基本コンセプトを提示し、複数の業者による企画コンペティションを実施。デザイン作業を担当する事務所を廣村デザイン事務所に決定しました。デザイン案の絞り込みと作業を進め、同年9月に最終案が承認されました。

最終案の提案書には、「大きさの異なる5つの球体は人間、科学、情報、文化、自然をバランスよく融合させ、社会的に優れた人材の育成を表現。また、函館市が世界都市を目指す5つの基本目標をも表現。未来へ増殖して行く限りない知識を曲線で。寒冷地にあつて、暖かさを感じさせる暖色で、包容力を。」というデザインへの思いが語られています。

シンボルマークの5つの球体には、本学の設立母体となった、函館市・上磯町・大野町・七飯町・戸井町の1市4町（当時）で構成する函館圏公立大学広域連合により運営される公立大学であることも表されています。平成の市町村合併により、現在は函館市・北斗市・七飯町の2市1町となりましたが、このシンボルマークが本学を支援してくださる地域の皆様を象徴していることに変わりはありません。

## 開学～創成期（2000▶2003）

2000年4月、公立はこだて未来大学は開学しました。4月7日に入学式が行われ、最初の入学生を迎えました。6月10日には、地域内外の関係者の方々をお招きして、開学記念式典が行われました。開学記念式典の祝賀会では、大学のシンボルマークをかたどったデザート盛り付けなど、楽しいもてなしが工夫されました。教員のアイデアによりたくさんの風船をふくらませ、新入生や客人を歓迎する目にも鮮やかな飾り付けは、その後の本学行事の定番となります。

開学前の最初の入試広報で話題を呼んだの

が、伊東敬祐初代学長の「化けましょう」のメッセージです。開学前に作られた最初の大学案内では、《公立はこだて未来大学は大きくブレイクする可能性を持っています。世界の中で一目置かれる大学になっていこうと思っています。」「大学が化ける」ときは、「学生が化ける」ときです。みなさん、私たちといっしょに“化け”てみませんか？》というメッセージが、受験生たちの目を引きました。思いを込めたユニークなメッセージ、足で高校を回っての熱心なPR活動、マスメディアを通じた話題性の広がりが功を奏して、最初の



上：2000年開学記念式典祝賀会  
下：2001年入学式  
右：2001年入学式



入試には全国から 1,968 名が受験し、8.8 倍という高い受験倍率のなかから、1 期生 251 名が最初の未来大生となりました。

### 草創期のモットー「3つのC」

大胆に開口されたオープンな空間で活動を始めた教職員や学生たちは、当初多少のとまどいを見せながらも、徐々に空間を使いこなし、活発なコミュニケーションや協働作業を展開しはじめます。草創期のモットーとして、伊東初代学長による「3つのC—Challenge, Communicate, Create」——誰もやっていない新しいことに失敗を恐れずに、情熱をもってチャレンジする；IT 時代だからこそ、人と人とのつながり、コミュニケーションを大切に；新しい友人、先輩、先生と出会い、共に新しい大学をつくる体験を共創＝co-create するとともに、一味ちがう新しい自分を創る——がうたわれました。

計画段階で空間設計に埋め込まれた教育理念が、実践によって生き生きと花開くなかで、「オープンスペース、オープンマインド」というフレーズもうたわれるようになります。単に空間が開放的であるだけではなく、教職員・学生ら、ここに集う人々がオープンマインド



最初の大学案内より

なコミュニケーションを行うなかで、おのずと学習が実践されていく——環境と人間が調和する中で、豊かな人間性が育まれていく姿が明確に表現されたポリシーです。

### 学内外での活発なイベント開催

草創期の未来大生は、1 期生、2 期生をはじめとして、大学生活のパイオニアとして、また地域と大学の連携のパイオニアとして大活躍しました。2000 年 10 月には大学祭「未来祭」を 1 年生のみで初めて実施。多数の地域住民の方々が、大学キャンパスを訪れました。さらに 2001 年 7 月には、未来大生の呼びかけにより、函館市内の大学・専門学校生などによる合同大学祭「大門祭—ガクセイレボリューション 21—」を開催。大門祭は、函館駅前商店街の大門地区の活性化を目的とし



入学式風景  
(2001 年)

ており、デパートが閉店した後の空きビルや屋外ステージを会場に様々なイベントが行われ、3日間で約3,000人を集めました。

教職員もまた、ゼロからの教育・研究活動をスタートさせるとともに、公開講座や地域でのイベント開催などに熱心に取り組みました。開学当初から、学会やロボット競技大会などの全国大会や国際大会が多数開催されてきたのも本学の特徴であり、教員の研究活動のポテンシャルの高さを示しています。当初の主要なものだけでも、ロボカップジャパンオープン2000（2000年6月）、日本認知科学学会大会（2001年6月）、日本ソフトウェア科学学会大会（2001年9月）、日本デザイン学会秋季大会（2001年10月）、ACM国際大学対抗プログラミングコンテストアジア地区予選函館大会（2001年11月）など、枚挙に

暇がありません。高校生を対象としたオープンキャンパスも、2000年8月から毎年開催されています。アカデミックな学会から、市民との協働イベントまで、学内外での多種多様なイベントは、今日まで活発に行われています。

2001年7月には、本学と地域社会との接点を広げることを目的に、函館駅前のTMOビル内に、サテライトオフィスFUN（通称FUN BOX）を開設、国際交流事業や市民公開講座、2002年度からは函館市と共同でIT系企業を対象とした「IT企業塾」などが開催されました。

### 開学後のカリキュラム見直し

開学後、学生を迎えて講義が始まるとともに、当初のカリキュラムと現実の学生の受容



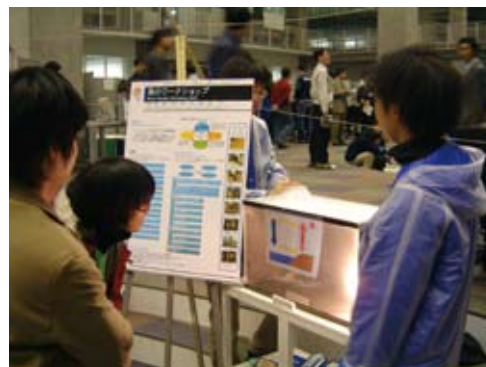
上：日本認知科学学会大会（2001年6月8～10日）  
左2点：ACM国際大学対抗プログラミングコンテスト  
アジア地区予選（2001年11月10～11日）

とのミスマッチを見直し、修整を図っていく作業も行われます。2000年8月には早くも改善案の策定を行い、初年度のうちに、情報技術に重点をおいた情報系科目の追加、複雑系や情報アーキテクチャを学ぶ上で重要な科目の追加を行い、体系的に学び理解を深めるために、科目の履修時期を変更調整し、将来の就職や進学などの目標を意識して学習が進められるように、漠然としていた履修モデルの位置付けを明確化する、といった改善が行われました。以降、2005年度に大規模なカリキュラム改訂が行われるまでの間、継続的な見直しと修整・改善作業が続けられます。

2000年11月には、2期生の募集に向けて初のAO（アドミッションズ・オフィス）入試が実施されます。以降、本学入試においては、自己表現とプレゼンテーションを重視したAO入試をはじめ、地元枠を重視した推薦入試、幅広い出題分野で構成した一般入試など、様々な形態の入試を行うことにより多様な人材を受け入れる方針を取ってきました。開学前の第1回一般選抜入試から、全国各地の受験生の便宜をはかるため、函館のほか、札幌および東京、さらに2003年度からは大阪にも入試会場を置いています。

## プロジェクト学習の導入

1期生が3年生になるのに伴って、2002年度から「プロジェクト学習」（正式名称：システム情報科学実習）の授業が開始されました。学生と教員が、プロジェクトのテーマごとに分かれてグループを組み、1年間をかけて課題に取り組むこのスタイルは、当時、他に先例のない本格的な実践重視の科目でした。初めての試みに手探りで挑みながら、学生と教員が丸となって各テーマに取り組み、



プロジェクト学習成果発表会（2003年）

今日まで引き継がれるプロジェクト学習のパイロット・モデルが構築されていきました。

3年生の就職活動とその支援も行われ始めます。2002年夏には、3年生による企業へのインターンシップが初めて実施されます。2002年12月には、学内で初の合同企業説明会が実施され、リクルートスーツ姿の未来大生が見られるようになります。

## 最初の自己評価作業

2002年度には、2000～2001年度の開学後2年間の活動への自己評価の作業が行われ、2003年3月に最初の『公立はこだて未来大学 自己点検・評価報告書』として取りまとめられました。大学の概成を待たず、早期の段階での自己評価を行ったのには、本学の独創性を保ち続けるには、成果のフィードバックと改善を短いサイクルで回し続けることが必要であること、そのために本学の実情をできる限り迅速に開示し、外部からの意見・批判を積極的に仰いでいこうという意図があります。以降2～3年ごとに同様の作業を行い、『自己点検・評価報告書』を刊行してきました。

引き続き2003年度には、最初の自己評価

では未完成だった次のステップへの計画を策定すべく議論が進められました。教育・研究・運営のそれぞれの側面ごとに、現状の問題点に対する解決策、特色に対する強化策が整理され、2003年10月に報告書として取りまとめられます。

こうした議論を受けて、本学の特色であるプロジェクト学習をさらに発展させていくために、文部科学省の助成事業に公募して資金を確保していくことや、専攻としてのコース制の導入、地域連携・産学官連携の推進のための共同研究センターの設置などの計画が提示され、翌年度以降、順次、実践に移されていきます。このほかにも、教員の研究時間の不足や研究支援体制の不足に対処するために、教員が担う様々な大学公務を共有化する「ワークシェアリング」制度や教育を免除され

る研究特任教員制度の導入など、検討すべき様々な計画が提言されました。

### 1年前倒しの大学院設置

2003年4月には、大学院「システム情報科学研究科」も誕生します。大学院の設置については当初、初めての学部卒業生が進学できる2004年度を予定していましたが、予定を1年前倒しにして準備作業を進め、2002年6月に大学院の設置認可申請を行い、2003年度からの設置となりました。初年度は、本学3年生からの飛び級での早期入学者1名(手続き上は学部退学による進学)を含め、他大学からの進学者と社会人学生を迎えて、博士前期課程9名、博士後期課程5名でのスタートとなりました。



プロジェクト学習成果発表会（2003年）

# 学内の情報通信環境は、

ごく当たり前にそこにある、空気のような存在となっています。

開学以来、学生は1人1台のノート型パソコンを持って大学生生活に臨みます。

高度な情報通信環境によって効率的な教育・研究、学習の環境が得られるとともに、

情報リテラシーを自然と身に付けることができます。



情報ライブラリー（図書館）



コンピュータ教室

## 徹底したフリーアクセス

開学当初から、いつでもどこでもアクセスできるよう、コンピュータ教室はもちろん、講義室にはPC用の情報コンセントと電源がついた机が約800台、フリースペースである吹き抜け大空間のスタジオ、図書館、体育館などあらゆる場所に、フリーアクセスできる情報コンセントが約1,800個近くも配備されています。学内のLANにつないで、メンバー間での情報共有や共同作業といったグループワークへの運用、さらにはオンラインでの履修登録から課題提出、授業評価といった全学システムに至るまで、教育・研究インフラ、教務インフラに日常的に供用されていることが特長です。

## 常に最新の環境をキャッチアップ

この10年間、めまぐるしく高速化してきたネットワーク、計算処理能力を大幅に向上させてきたコンピュータなど、最先端の情報通信インフラをキャッチアップするために、ほぼ4年ごとに大きな更改に取り組んできました。陳腐化しない情報通信環境を維持し続けることは、教育・研究の生命線ともいえます。2005年度には研究棟整備にともなって、汎用性の高い研究用ネットワークを新設、現在は幅広い用途にも利用可能なシステムとして発展的に運用しています。2009年度には、学内のほぼ全域で無線LANが利用できるよう整備がなされました。

## セキュリティと利便性への配慮

大学のネットワークには、不正使用やウィルスの侵入にも強い耐性をもつことが要求されると同時に、研究のための柔軟な運用も必要になります。学内教育用ネットワークへの接続にあたっては、2004年度のシステム更改にともない、教職員・学生など、利用者すべてに対して、アカウントとパスワードによる認証を義務化し、利用資源の階層化やシステムへの不正侵入防止を行っています。その後、各種通信の暗号化やそれに伴う電子メールや一部サーバの学外からの利用を可能にするなど、システム全体の運用の安定化や利便性に関する改善を行ってきました。



スタジオの開放的な空間。学生は思い思いの場所を陣取り、パソコンをネットワークにつなげて作業を行う

## 概成期～大学法人化へ（2004 ▶ 2009）



2004 年度からは、草創期を担ってきた伊東敬祐初代学長からのバトンを受けて、情報科学、人工知能では日本を代表する研究者の中島秀之が 2 代目学長に着任します。2004 年 3 月に初めての卒業生を送り出して、2004 年度からは、ようやく形のできてきた大学の骨格に中身を整えていく過程——概成期に入ったといえます。中島学長は当時、国公立大学で最も若い 51 歳で学長に就任、大学ホームページの学長あいさつでは、大型バイクにまたがる若々しい姿で颯爽と登場し、本学に新たな息吹を吹き込みました。

同じ 2004 年 4 月には、学部で最初の卒業生の中から 42 名が本学の大学院へ進学します。博士前期・後期課程ともに大学院での指導も本格化するなかで、教員の負担も大きくなり、教育と研究のバランスの取れた活動をいかに推進していくか、そのための制度的・

組織的な支援も課題となっていきます。

研究や実験のためのスペースも不足しており、校舎（本部棟）西側に隣接して新たに研究棟を増築することになりました。本部棟と同じく（株）山本理顕設計工場の設計で、2004 年 5 月に着工、2005 年 2 月に竣工し、4 月に利用を開始。2 階建て、延床面積約 4,400㎡の建物に、教員室、院生室、実験室、





上：研究棟外観／下：研究棟実験室

ミーティングなどに利用されるコアスペース、ロボット制作室、メディアラボ、デモスペース、リフレッシュスペースなどが配置されました。

### 「3つのC」から「4つのD」へ

受験生や学生に対しては、開学当初の話題性を超えて、本学の実質的な魅力を伝えていくメッセージが必要とされていました。草創期からの「オープンスペース、オープンマインド」というポリシーは、本学の特色を最も明快に表しており、壁を取り払ったオープンなスペースと、開放的なコミュニケーション

によって醸成されるオープンマインドな風土が、表裏一体に結びついていることを強調するメッセージとして、大学案内をはじめ様々な場面で今日まで用いられてきました。

中島学長は、本学独自の教育理念をさらに深化させるために、「4つのD」——Discover yourself＝自分発見：自分の個性、能力、可能性に対する自覚へと導く；Discover new world＝世界の再発見：自己の置かれた環境を見つめ、新たな課題を見出す；Develop yourself＝自己開発：問題解決の技術や他者との対話能力を得るための環境を与える；Develop the world＝社会還元：実際の社会と触れ合い、社会改善に導く場を与える——というスローガンを打ち出します。伊東初代学長の「3つのC」が、草創期の学生に開拓・挑戦・創造の精神をメッセージしたのに対して、「4つのD」は、充実した環境の中で、学生がみずからの人間性や専門性を積極的に開花させることを強調したメッセージです。

### 研究推進と産学官連携の体制づくり

教員らの努力により、国や民間企業などからの外部研究資金が着実に増加するなかで、外部資金のさらなる確保と公正な執行のために、研究推進の組織的な支援体制が必要とされていました。すでに国の大型プロジェクトとして、地域科学技術振興の競争的プロジェクトである「文部科学省知的クラスター創成事業：札幌ITカロッツェリアの創成（2002～2006年度）」に複数教員がグループを組んで参加しており、さらに函館エリアが「文部科学省都市エリア産学官連携促進事業（一般型）：水産・海洋に特化したライフサイエンス領域（2003～2005年度）」に採択されるに伴い、本学も北海道立工業技術センターや北

海道大学大学院水産科学研究院とともに研究機関として名を連ねるなど、この時期に受託研究の外部資金が飛躍的に伸びました。

産学官連携や共同研究の推進についても、草創期に結成された産学連携委員会の体制からさらに進めて、独立した組織体制の確立が課題となっていました。こうしたなかで2004年4月に学内に「共同研究センター」が開設され、産学官連携や共同研究等の推進支援、さらには知的財産活動のための組織的な推進体制づくりが端緒に着きます。2005年度からは共同研究の外部資金も大きく伸びていきます。

2005年5月には、東京・秋葉原駅前再開発地域のダイビル内に東京サテライトオフィスを開設、首都圏での教員の研究活動、学生の就職活動、首都圏の同窓会活動、東京でのプロジェクト学習成果発表会等の支援拠点として活用されます。初代学長の伊東敬祐が学長退職後にサテライトのコーディネーターを務めました（～2008年3月）。その一方で、2006年3月には、草創期に本学と地域との連携の場としての役割を果たした函館駅前のサテライトオフィスFUN（通称FUN BOX）が閉所、地域連携もさらに新たな次元での展開を目指すようになります。

## カリキュラムの大改訂と コース制導入

2005年度には、開学以来5年間を経て、既存のカリキュラムの大幅な見直しが行われ、新カリキュラムが導入されました。開学以来の継続的な自己点検作業を通じて小さな改変は行ってきたものの、もはや対応しきれない問題点を解決するために、大きな枠組みからの改編を目指して、2003年からワーキ

ンググループを立ち上げて準備を行ってきたものです。

新カリキュラム導入と同時に、従来は履修モデルというかたちに過ぎなかったコースをより明確に位置づけ直し、定員枠を定めた専攻としてのコースというかたちへ改編しました。複雑系科学科には複雑系科学コースの1コース、情報アーキテクチャ学科には情報システムコース、知能情報コース、情報デザインコースの3コースが設定され、2学科4コースという構成で、2006年度の2年生からコースへの配属が行われるようになりました。

コース制の導入に伴い、従来、複雑系科学科と情報アーキテクチャ学科に分けて、それぞれ定員枠を設けて実施していた入試は、2006年度入学の試験からシステム情報科学部全体での入試に一元化することとなりました。



オープンキャンパス（2005年）

た。この改編に従って、1年次は全員が基礎的な専門科目をしっかり履修するカリキュラムへ変更されました。

### 文科省「特色GP」プログラムに採択

こうした動きと並行して、2003年からプロジェクト学習の強化策の1つとして課題に挙がっていた、国の助成金獲得へ向けた準備作業も行われました。ワーキンググループにおいて『解がない問題への自己組織的アプローチ：実社会で役立つ力の養成』というテーマで教育構想を練り上げ、2006年度の文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」（略称：特色GP＝Good Practice）に応募、学士課程を対象とする事業への申請件数220件のうち採択件数31件という、たいへん厳

しい競争倍率のなかでみごと採択され、3年間のプログラムに取り組みます。

本学のカリキュラムで大きな比重を占めるのが、グループワークで実践的課題に取り組む3年次のプロジェクト学習です。2002年度に最初のプロジェクト学習を導入してから4年間の経験を積むなかで、すでに本学の取り組みは大学教育におけるGood Practiceであり、他大学に一步も二歩も抜きん出ているという自負がありました。特色GPの3年間（2006～2008年度）を通じて、プロジェクト学習のパイオニアとしての本学の取り組みを広く全国へ啓発していくとともに、その特色ある内容——他者との協調的学習、複数の教員によるチーム・ティーチング、社会の実問題への取り組みといったコンセプトを、さらに洗練したものへ深化させていくことが目



上：教員によるプロジェクト学習テーマ説明会（2008年）  
右上：地元病院でのプロジェクト学習実習風景  
右下：地元小学校でのプロジェクト学習実習風景





指されました。

また、1年次から学んできた基礎科目・専門科目の知識や技術をプロジェクト学習のなかでいかに活用していくか、さらにプロジェクト学習で学んだことを4年次の卒業研究へどうつなげていくかという、カリキュラム全体との関連性についても、改善と深化が目指されました。

カリキュラム改編、特色GPなど、一連の取り組みを通じて、専門職の卵として「システム情報科学の基礎を身につける」ことと、社会人の卵として「学生1人ひとりがみずからの可能性を引き出し、伸ばす」という、専門性と人間性の両輪がかみ合った教育に一定の成功を収めることができました。こうした努力の1つの結果が、ほぼ100%に近い高い就職率(2003～2009年度の7年間の平均99.1%)と、就職先企業からの高い評価——首都圏や関西圏のIT系企業や情報機器メーカーの採用担当者のあいだに「未来大ブランド」が急速に浸透したという事実表れています。

## 公立大学法人への移行

国の大学政策の転換に伴い、2004年4月国立大学が法人化され、公立大学においても大学運営の自立化に向けて相次いで法人化するなか、本学でも法人化についての議論が本格化します。2006年4月に法人化検討委員会を設置し、7月には同委員会から「本学の公立大学法人化移行検討方針」が示され、学内の意向として、2008年4月法人化実施を目標に準備を進めることが決定されます。

これを受けて、函館圏公立大学広域連合では、2006年12月に広域連合議会で2008年4月法人化移行を目指すことを表明し、法人化に向けた取り組みを進め、2008年4月理事長＝学長一体型の公立大学法人公立はこだて未来大学が設立されました。

本学が目指す法人化の趣旨として、活性化された組織の維持、地域連携・産学連携のさらなる強化・推進を目的に、①より柔軟・迅速な意思決定を図る、②中期目標・中期計画により目標を明確にし、Plan-Do-Check-

Actionのサイクルに基づく経営戦略を推進する、③弾力的な雇用形態・勤務形態等の導入により、教職員の多様な活動を可能とする、④法人会計の導入により、より効率的・弾力的な運営を図ることなどが挙げられました。

法人化に伴い、公立大学法人公立はこだて未来大学としての新たな運営体制がスタートし、理事長に中島秀之学長、副理事長に岩田州夫教授、理事・副学長に小西修教授が就任するとともに、法人の審議機関として、経営審議会、教育研究審議会が設置されました。

## FUN2020——次の10年に向けて

法人化と時を同じくして、次の10年へ向けた様々な取り組みが活発化していきます。2008年4月にはメタ学習センターが新たに設置されます。メタ学習センターは、本学が目指すべきリベラルアーツ教育を、「総合的なコミュニケーション力」と「幅広い教養と多角的な視点から物事を判断する能力」を育

成するためのものと改めて定義し、そのための学習・教育プログラムを系統的・組織的に開発実施していくために設置されました。本学では開学以来、教養科目はもちろんのこと、コミュニケーション教育、プロジェクト学習などへの取り組みを通じて、独自のリベラルアーツ教育を実践してきました。メタ学習センターの設置により、改めて学生や教職員がこうした実践の背景にある理念を明確に共有し、「オープンスペース、オープンマインド」という言葉に象徴されるような学習・教育の場を、成員一人ひとりがより活力あるものと革新し続けるための仕組みづくりを目指しています。

次の10年を見据えた学科改組への準備も始まります。システム情報科学という新領域の創成を、さらに次の段階へ進めることを改組の趣旨とし、2008年5月から学科改組検討ワーキンググループを設置、2009年1月までに、改組案とそれに伴うカリキュラム改訂案が順次策定されます。改組により、情報デザイン系と情報システム系の2本柱でITの川上から川下までを統合的に見据える新生「情報アーキテクチャ学科」と、複雑系科学に知能システム系の領域を統合した「複雑系知能学科」の新たな2学科体制とし、2010年度入学生からを対象に改組が実施されることとなりました。これに加えて、社会の要請に応じてより即戦力の実力を身に付けた人材を育成するために、学部と大学院博士前期課程の6年間一貫教育を行う「高度ICTコース」が新設されることが決まりました。

2009年4月には、いよいよ設立10年目の節目を迎えます。次の10年の飛躍へ向けた「FUN2020」というキャッチフレーズを掲げ、折しも函館開港150周年を迎えた地域の盛り上がりのなかで、記念講演会などのイベ



ントや北海道新聞全道版の全面 PR 広告などが展開されます。

2009 年度には共同研究センターを中心に、新たに社会連携ポリシー、知的財産ポリシーを策定する作業に着手しました。共同研究のみならず、プロジェクト学習などの教育活動、地域での学術文化啓発活動にわたって幅広く展開される本学の産学官連携や地域連携活動を、「社会連携」という大きな枠組みのもとで捉え直すこととしました。こうした枠組みのもと、本学が次の 10 年に戦略的に推進する研究テーマとして、マリン IT、メディカル IT、モバイル IT の 3 領域を「3つの MIT」と称し、全学的なプロジェクトを展開するとともに、地域内外での PR 活動に力を入れています。

年度が明けて 10 周年を迎えた 2010 年 6 月 12 日には、「開学 10 周年記念式典」が本学に

て執り行われ、多数の方々にご参列いただきました。式典に続いて開学に尽力された広中平祐氏による記念講演、そして祝賀会が賑やかに行われました。



卒業式風景（2006 年 3 月）



Part 2 Fun's Identity

# 科学技術×人間×社会の 未来を創成する



# システム情報科学——新しい学術領域の創成

公立はこだて未来大学は、システム情報科学部1学部からなる単科大学として創設されました。新しい情報系の大学は、21世紀社会のシステムをデザインしていける人材の育成を担っていく——すなわち限られた技術領域だけで訓練された人材ではなく、必要とされるシステムを見きわめデザインしていくために、情報技術や社会技術、あるいは自然科学や人文的な素養を統合していける力を持った人材を育てていくことがふさわしい——こうした趣旨のもとで構想された本学の新しい学術領域には、「システム情報科学」という独自の名称が付されました。このなかに、複雑系科学と情報アーキテクチャ学科の2学科が置かれ、2つの領域が独自の「システム情報科学」を織りなす、世界的にみても他に類のないユニークな情報系大学としてスタートしました。



開学前に制作された最初の大学 PR ポスター

## 「複雑系」と「情報」が織りなす学際領域

複雑系科学は、複雑な現象の高度なシミュレーションを可能にしたコンピュータの発展のもとで、非線形数理科学と情報科学とが融合して生まれた総合科学です。1990年度に政府が出した「わが国の文教施策」でも、情報科学系の今後の動向として非線形システムを含む複雑系の研究が必要であること、さらに長期的な展望として人文・社会科学系までを含めて情報に関する学問の体系化を推進することが重要な課題とされています。

こうした時代背景のもと、本学の複雑系科学科は、日本で初めて学部教育として複雑系科学を専門に教える学科として開設されました。21世紀社会において、これまでの科学で説明できない複雑な諸現象の挙動の解明を図る視点と素養を持ち、社会を高度に支えるシステムを設計していける人材の育成に取り組んできました。この10年で独自の教育体制を構築するとともに、複雑系の素養を持った学生が適材適所の職場を得て就職していくようになり、社会からの要請に確かな手応えを感じてきました。現在もなお、複雑系システムを取り扱う情報系の大学は少なく、本学の存在は希少なものであり続けています。

一方の情報アーキテクチャ学科は、情報科学や情報工学を核としつつ、デザインや認知心理学の素養を身に付けることで、システム開発やプログラミングのみならず、人間と機械との協調的関係や快適な情報環境を追求し、人とコンピュータの新しい関係を切り拓くことのできる人材（＝情報アーキテクト）を育てることを目指してきました。情報技術を社会と人間にとってより価値あるものにしていくには、利用者である人間を中心とする情報システムをデザインし、革新的な情報メ



講義風景

ディアを創出していくための視点が必要です。従来の「機械中心」の情報技術から脱却し、「人間中心」の視点に基づくまったく新しい教育研究の体系と環境が必要であるという趣旨のもと設置されたのが、情報アーキテクチャ学科です。

### 学部——「多視点性」と「専門性」の両立

新しい学術領域の創成は、新しい教育カリキュラムを確立することから始まりました。システム情報科学という学際領域のなかで、学生一人ひとりもまたできるだけ自由に、みずからの目的意識のもとに選択肢を求めていってほしい——そうした教育の理想を掲げつつも、未熟な若い世代が咀嚼するのはなかなか難しいことです。開学当初は、入学時から複雑系科学科、情報アーキテクチャ学科に専攻が分かれてはいたものの、学科を横断してどの科目も自由にとることができるため、関連づけを考えずにあれもこれもと履修してしまうなど、結果的に消化不良の状態に陥ってしまう学生が多く見受けられました。また、本学が期待する理数系の基礎学力が高校までに十分養われていない学生も多く見受けられ、講義と学生とのレベルのギャップも問題



メディアラボ

となりました。

こうした問題を解消し、「多視点性」と「専門性」という本学の特長を両立させていくために、初期の教育体系を見直し、2005年度にはカリキュラムの大改訂と、専攻としてのコース制を導入しました。複雑系科学コース（複雑系科学科）、知能システムコース、情報システムコース、情報デザインコース（以上、情報アーキテクチャ学科）の4つのコースを設定してそれぞれに定員枠を設け、学生は2年次になった段階でその中から1コースを進路選択するという制度を導入しました。

コースへの配属という制約を設けることによって、系統性をもった科目群の履修を義務づける一方、幅広く柔軟な視野を持った学生を育成するという教育理念は変わりありません。4年間を通じて、多視点性と専門性がバランスよく養成されるよう、カリキュラム改訂は慎重に行われました。2年次にコースに分かれて専門科目を学んだ後、3年次に1年間をかけて取り組むプロジェクト学習では、コースを横断してグループが編成され、異なるコースの学生間の協働を通じて多視点性を養います。4年次には全員がそれぞれの卒業研究に取り組み、みずからの専門的テーマを深めます。

### 大学院——現実問題の解決から 新原理の探究へ

2003年に設置された大学院もまた、システム情報科学研究科・システム情報科学専攻の1研究科1専攻でありながら、その中身は複数の研究科にわたるような広い学術領域をカバーしています。そのため、研究科の下に4つの研究領域——複雑系情報科学領域、知能情報科学領域、情報アーキテクチャ領域、メディアデザイン領域——を設定して、多彩な出身分野からの学生を受け入れられるよう入試時の選択肢とするとともに、履修や研究課題設定のガイドラインとしています。多様な学際的研究が展開されることを想定し、領域を横断した講義履修やゼミへの参加などは柔軟に行うことができます。

博士前期課程（修士課程）では、現実の社会システムを直視し、そこから問題を発見し、解決し、さらに新たなシステムを設計することができる人材の養成を、また博士後期課程では、問題発見能力や問題解決の実践能力をベースに、システム情報科学の新しい原理、新しい問題解決手法の探求を行える人材の養成を目指しています。

### 実践的なIT人材育成で全国から注目

近年では、日本の企業が中国やインドなど、海外の高学歴なIT系の人材を積極的に採用するようになっており、日本の高等教育における情報教育の質の向上が国家的課題となっています。最先端の情報技術、とりわけソフトウェアの技術によって、社会を変革していくことのできる人材が、日本では圧倒的に不足しているといわれています。こうした背景のなか、本学では早くからプロジェクト学習において、東京の大手IT企業との産学連携や、地域の病院等との社会連携によるプロジェクト・テーマを導入し、その取り組みはマスメディア等でも再三取り上げられてきました。

経団連による報告書『産学官連携による高度な情報通信人材の育成強化に向けて』（2005年6月）では、「産学連携の実践教育によって高度ICT人材を輩出している、わずかな成功例」として、本学の名前が挙げられました。病院と連携したプロジェクト学習の取り組み、「大規模病院における患者と病院とのコミュニケーションシステム」は、2005年度のグッドデザイン賞・新領域デザイン部門を受賞し、話題を呼びました。

こうした実践的な取り組みは、専門科目にも広がっていきます。2004年度には、実践



左：エレクトロニクス工房 右：卒業研究発表風景

#### 【研究活動の事例】

- 左：視覚障害者向けのインタラクティブな知覚拡張器「CyARM」
- 中：古文書の手書き文字認識・検索システム
- 右：海の気象や資源をセンシングするユビキタスブイ（北海道鹿部沖）



- 左：仮想空間での協調作業研究中：インタラクティブ・アート「Art Accelerator」（金沢21世紀美術館）
- 右：高解像度カメラとFPGA（プログラマブルLSI）を用いた画像処理装置



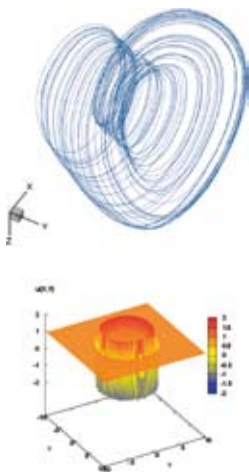
的教育の推進を意図した「高度情報技術教育プログラム経費」の学内予算が生まれ、組み込みシステムやWebアプリケーションの開発教育、情報空間のデザイン教育のプログラムが開発され、講義にも活用されていきます。

さらに2007年度からは、地元と首都圏の複数のIT企業による寄附講座「実践的IT人材育成講座」が設置されます。組み込みシステムコース、エンタプライズシステムコース、それぞれ週1時間の講義と3時間の実習から構成され、学部4年生と修士1年生の約40名が履修する講座となりました。この取り組みが発展して、2010年度からの学科改組において、学部から博士前期課程（修士課程）までの6年制カリキュラムによる「高度ICTコース」の設置に至っています。

化的な事象をも研究対象としています。したがって本学には幅広い分野の研究者がおり、その専門は情報科学・情報工学をはじめ、芸術、デザイン、物理学、数学、経済学、社会学、生物学、医学、認知心理学、コミュニケーションなど、多岐にわたります。またキャリアという点からみても、企業等の出身者が全体の4割近くを占めるなど、アカデミック一辺倒ではない、多彩な研究経験・社会経験を積んだ教員が揃っています。

さらに教員同士の連携がきわめて活発に行われていることも本学の特徴です。非線形数理論と情報工学、医療システムとデザイン、プログラミングとものづくりといった、学際的な協働が実践され、学部教育においては大学院レベルでしか見られないようなテーマでプロジェクト学習や卒業研究の実施を、大学院においては学生一人ひとりの多様な課題に、異なる専門領域の教員が協力しての論文指導を可能にしています。研究活動においては、個々の教員の先進的な研究を核としながら、新領域の開拓を目指した学際的な共同研究を展開し、国の大型研究資金なども獲得していることが、本学の大きな魅力であり強みとなっています。

#### 【複雑系科学の研究事例】



- 上：船のカオス的な揺れ方の運動を表すアトラクタ
- 下：自然界の様々なパターンを記述できる反応拡散系のパターン

#### 多様な専門性とキャリアを持つ教員構成

教員がカバーする研究領域の広さも、本学の特筆すべき特徴です。複雑系科学やシステム科学は、それぞれが多彩な学術領域の融合的な性格をもっており、自然系、生命系、情報系の事象のみならず、経済的・社会的・文

## 「オープンスペース、オープンマインド」という風土



スタジオでのグループワーク風景

イギリスやアメリカの歴史ある大学では、大学は共同生活の場であると考えられ、学生や教職員、訪問客などが思い思いに集うカフェテリアやダイニングルーム、図書館、野外スペースなどの「コモン」といわれる共有空間がとても大切にされてきました。大学には、もともとそうした共同の場としての役割があります。しかし近年の大学では、学生は自分の部屋と大学の講義室を行き来するだけで、サークルへの参加や友人関係の形成が希薄になり、人や社会との交流機会も少なくなる傾向にあるといわれます。

本学の開学にあたって大切にしたのは、函館というコンパクトな都市の中で、学生たちがこの街や大学とともに成長していけるような環境を創るということでした。大学生活で

の「学び」とは、教室での講義だけではなく、人との共同作業、大学や地域のコミュニティの中でのさまざまな共有体験を通して体得されていくものです。「大学とは共同体である」というそもそもの理念に立ち返り、新しい教育体系の導入を追求するなかで行き着いたのが、「オープンスペース、オープンマインド」という言葉に象徴される環境と風土の確立です。それは単なる抽象的なキャッチフレーズではなく、綿密に計画され、継続的に議論され、教育や研究活動、大学運営の実践において広く深く醸成され、歳月とともに確かな実体をかたちづくっています。

**オープンスペース——開放性と一望性**



左：学科事務室の壁に掲示された校舎内マップ（研究棟）  
中：講義室もすべて透明なガラス張り  
右：正面玄関（3階）から続くモール

どのような空間で活動するかは、人間の行動や心理に大きな影響を持ちます。本学のオープンスペースの中心となる「スタジオ」の吹き抜け大空間は、機能を限定しないフリースペースです。学生たちは思い思いの場所に陣取り、友人たちとおしゃべりをしたり、レポートを書いたり、あるいはまた、ぼんやりと函館山と函館湾の遠景を眺めたりして過ごします。スタジオに階段状に面して並ぶ教員室からは、こうした学生たちの姿が透明なガラスの壁越しに見渡せます。ここは教員と学生とが気配を感じ合うことができるとともに、互いの日常動線が複雑に交錯し、出会いと会話の風景に溢れる場所となっています。

校舎の中をめぐる、情報ライブラリー（図書館）、講義室、事務室など、すべて透明なガラス張りのオープンな空間となっています。ショッピングモールに見立てて設計された玄関前の広々とした中央通路は、移動のために行き交う人、ベンチに座ってパソコンを広げる人、立ち話をする人、ロボットを組み立てる

人、透明なガラス越しに講義室やコンピュータ教室、工作室などの活動風景を立ち止まって眺める人などが混在する空間となっています。学内の至る所に眺めの良いビューポイントがあり、校内を歩き回るだけで、だれが、どこで、何をやっているのか、一望に見渡すことが可能です。

## オープンマインド——他者に学び、集団や社会のなかで学ぶ

単に空間がオープンになっているだけならば、他にもいろいろな例があります。特筆すべき点は、本学では開学以来、オープンマインドを育む教育体系を導入・実践しており、オープンスペースとオープンマインドが表裏一体をなして、独特の風土が醸成されていることです。

大学は教師から学生へ一方的に知識を流し込む場ではありません。人は独り机に向かって勉強するだけで成長するものではなく、社

会の中、集団の中に置かれて、初めて自分自身の役割、能力、限界を気づくことができます。他者との協調によって、自分独りではなしえないことができる、チームを組むことによって、 $1 + 1 = 2$ を超える成果を生み出すことができます。オープンスペースは、こうしたオープンマインドにもとづく学習と成長のための重要な環境であり、インフラストラクチャであり、コミュニケーションのメディアでもあるのです。

本学ではオープンマインドの基盤となる教育体系の構築や改善に、教職員が一丸となり熱意をもって取り組んでいます。グループワークで課題に取り組む実習科目「プロジェクト学習」の実施、すべての科目で行われる授業評価フィードバック、複数の教員によるチーム・ティーチング制の幅広い導入などを通じて、オープンマインドを醸成する仕組み、オープンマインドでなければ実践できない仕組みが構築されています。

### プロジェクト学習——ゼロからの挑戦

本学の取り組みを最も象徴的に表しているのが、3年次に実施される「プロジェクト学習」

(正式名称：システム情報科学実習)の授業です。現実的な課題にグループで取り組み問題解決策を探るという実習重視の授業は、最近でこそたくさんの大学で取り入れられていますが、開学当時はまだ小規模で実験的な事例しかみられませんでした。本学のプロジェクト学習は、3年次の必修科目として学生全員が履修し、まる1年間をかけて問題発見から調査研究、解決策の構築まで取り組むという、全国でも例のない本格的なものでした。その後、他大学が似たような実習科目を導入し始めたものの、カリキュラムを大幅に改訂することの困難さや、教員全員がチームを組んで指導するという仕組みへの抵抗もあり、一部の学生が受講する選択科目や集中講義として置くに留まっているケースがほとんどです。

2002年度からのプロジェクト学習の実施に向けて、2001年度には若手教員を中心としたワーキンググループが立ち上げられました。議論の焦点はもっぱら、プロジェクト学習を本学の専門教育の中核的な科目とするうえでの、「質の保障」に置かれました。内容の専門性と専門教育としての効果をどう担保できるか、プロジェクト学習で学んだことと他の専門科目との関係はどう系統づけられる



左：スタジオでのプロジェクト学習成果発表会風景



右：スタジオの吹き抜けに面したバルコニーは絶好の観覧席



教員室前のフリースペース



スタジオ風景

のか、徹底した議論がなされました。その他、グループは何人編成か、テーマはどのように構成していくのか、教員側はどういう体制で臨むのか、グループワークに対して個人の成績評価はどのように行っていくのか、作業の時間配分はどうするのかなど、様々なことが議論され準備が進められました。大枠のやり方を決めつつ、実際にはやってみなければ分からないことも多くあり、実習現場での試行錯誤によって、本学ならではのメソッドが構築されました。地域の病院との連携、地元小学校との連携、首都圏のIT企業との連携などによるプロジェクトも早い段階から導入され、学生たちは街へ、地域へ、社会へと飛び出していきます。人のなかで、社会のなかで成長していくというオープンマインドの精神は、プロジェクト学習を中心に具現化されていきました。「プロジェクト学習を始める前と終わった後とでは、学生たちの顔つき、目の輝きがまったく違う」ということを、教員たちは実感しています。

### 複数の教員によるチーム・ティーチング

プロジェクト学習、4年次の卒業研究をはじめ、本学の講義科目の多くで導入されているのが、複数の教員によるチーム・ティーチングという仕組みです。第1に、プログラミング演習や情報表現などの全員必修の科目を

複数教員が担当する場合に、学生に不利益が出ないように、教員間で講義の内容と達成目標の保障、採点基準の公平性の担保を図っていきます。第2に、ヒューマンインタフェースや認知科学などの学際的な科目では、多彩な専門領域の教員がチームを組んで担当します。これも他大学ではなかなかみられない画期的な取り組みです。教員が3人以上でチームを組む場合も多く、代表者が取りまとめ役を務め、チーム内で授業内容を相談して決めていきます。第3に、プロジェクト学習では、毎年のプロジェクト・テーマの決定と教員のチーム編成が、教員間の自主的な話し合いのもとで行われます。開学当初、教員の間には多少のとまどいもありましたが、今では予想以上に浸透し、ごく当たり前のものとして受け入れられています。

これまで2002年度、2007年度の2回にわたり、教員へのアンケート調査を行っています。「複数の教員と担当することで、新たな講義方法や講義内容を思いつくか」という質問に対して、2002年は93%、2007年は90%の教員が「そう思う」または「まあそう思う」と答えています。さらに「関連科目について担当者と相談したことがあるか」に、2002年は90%、2007年は77%、「他の教員から研究上で刺激を受けるか」に、2000年は60%、2007年も60%、「担当科目について大学全体のカリキュラムを意識するか」



教員たちによるワークショップ風景

(上：教員と市民によるワークショップ、2005年10月／  
下：プロジェクト学習ワークショップ、2009年4月)

に、2002年は95%、2007年は97%もの教員が「そう思う」または「まあそう思う」と答えています。これらの数字からも、チーム・ティーチングの効果は早い段階から認識されており、他の教員と協調しようという姿勢、他の教員から学ぼうとする姿勢、大学全体の方向性の中で自分の講義内容を決めていこうという姿勢を見てとることができます。

### 授業評価フィードバック・システム

開学2年目に導入されたのが、オンラインによる授業評価フィードバック・システムです。すべての授業に対して、受講した学生が設問形式と自由記述形式の混在する授業評価アンケートにオンラインで入力し、集まった回答とコメントに対して、さらに教員側がフィードバックのコメントを返していくことのできる、双方向の評価システムとなっています。2001年度の段階で、全授業に対して一元化されたオンラインの授業評価システムを実施している大学はまだほとんど例がなく、さらに双方向のコミュニケーション・シ

ステムとして機能しているものは、現在でもそう多くはありません。

導入しながらの試行錯誤を続け、最初は匿名だったものを途中から記名形式に変更し、教員からは採点終了後にしか名前が分からないよう配慮し、真摯かつ責任ある回答を行ってもらうなどの改善を加えています。教員への授業改善提案の欄や、次年度以降に履修する学生へ向けたアドバイスの欄を設けたところ、建設的な意見が多数書き込まれると同時に、「自分もこうすればよかった」と振り返る反省的な書き込みが多く見受けられ、評価フィードバック・システムそのものが、ひとつの学習の場として機能していることが見てとれます。

### コミュニケーションと英語の複合教育

コミュニケーションやプレゼンテーションの力を育てることも、重視している柱の1つです。1年次、2年次の各年、2科目ずつのコミュニケーション科目を必修とし、講義は外国人教員または英語ネイティブの教員によって、すべて英語によって行われます。高校教育までの英語とは異なる、伝えるためのコミュニケーションと英語の力を鍛える授業です。また2002年度後期からは、いくつかの講義科目で、その講義に関連した英語のボキャブラリーや表現を学ぶ、VEP (Virtual English Program) という科目が試験的に導入され、2004年度から正式な科目となっています。

特筆すべきことは、本学にお



上：英語で行われるコミュニケーション科目の授業

下：進学ガイダンスで高校生への進路相談を行う外国人教員



情報ライブラリー（図書館）



講義風景

ける外国人教員の比率の高さです。コミュニケーション担当の教員はそのほとんどが外国人教員であるのに加えて、複雑系科学科と情報アーキテクチャ学科、それぞれの専門領域でも外国人教員が活躍しており、プロジェクト学習や卒業研究の指導にも参加しています。2009年度の数字でみると、教員数69名のうちじつに12名が外国人教員です。大学4年間、さらには大学院を通じて、外国人と密に接する環境のなかで、英語への壁、外国人とのコミュニケーションの壁が自然となくなっていくことが、本学の特徴であるといえます。

### 専門性に文脈を与えるリベラルアーツ

21世紀に入りますます複雑さを増す時代に呼応し、みずから未来を開いていける人材を育てるには、専門能力の養成とともに、その専門能力を社会のなかで十全に活用していくための、メタスキル（技能を活用するための技能）の力が重要となります。今日の情報社会においては、みずからが知り得ないことは積極的に他分野の知識、知恵を借りて解決していこうとするオープンマインドな姿勢と、何が必要かを直観的にかぎわける力としてのメタスキルを身に付けることこそがリベラル

アーツ（教養）教育であるといっても過言ではありません。

本学では開学以来、教養科目はもちろんのこと、コミュニケーション教育やプロジェクト学習において、学生がメタスキルの力を身に付けることに力を入れてきました。2008年度から設置されたメタ学習センターは、こうした本学独自の教育＝学習の方法の開発に、恒常的に取り組む組織として新設されました。本学が目指すべきリベラルアーツ教育を、総合的なコミュニケーション力と、幅広い教養と多角的な視点から物事を判断する能力を育成するためのものと再定義し、そのためのプログラムを系統的・組織的に開発・実施していくことをその使命として活動をスタートさせました。

近年では国の指導もあり、「ファカルティ・ディベロップメント」といわれる教育の改善や開発への取り組みのために、専門部署の設置や教員研修プログラムなどを導入することが各大学に要請されています。本学ではメタ学習センターが、そうした役割も担いつつ、より広い意味での学習と教育の拠点として、学生と教職員が共に能力を開発していくための場として機能していくことが目指されています。

## 地域との連携、社会との連携

公立はこだて未来大学は、函館圏公立大学広域連合により設置された大学として、「知的・文化的・国際的な交流拠点として地域社会と連携し、地域の学術・文化・産業の振興に貢献する」ことを、開学時より設立趣旨の1つの柱に掲げてきました。この10年、地域社会との多様なかわりのなかで様々な活動を展開し、その目標像へ近づく努力を積み重ねてきました。

大学が地域のシンクタンクとして機能し、地域振興に貢献していくには、やはりその活動と社会的知名度が全国レベル・国際レベルの高い水準を維持している必要があります。本学は開学以来、アカデミックな専門領域においても、また大学運営の面においても、常に話題を提供し、注目される存在であり続けてきました。こうした信頼を培うなかで、本学の地域連携、産学連携、さらには地域とい

う枠組みに留まらない広がりのある社会連携がどのように発展してきたかを振り返ります。

### 地域の一員としてデビュー

開学当初は、大学の存在を市民の方々に身近なものに感じていただくこと、地域の一員としての存在を表明していくことへの努力からスタートしました。2000年7月には情報ライブラリー（図書館）や体育館などの地域住民への一般公開がスタートしました。8月のはこだて港まつり「ワッショイはこだて」には教職員と学生ら60人が参加、大学のシンボルマークをあしらった台座にロボットを載せた山車を制作、揃いの赤いはっぴ姿で引きまわし、地域へのお披露目を果たしました。開学前年、1999年の港まつりにも、広域連合の事務局が大学PRを兼ねてすでに参加を



未来祭（2005年）



上：はこだて港まつりへの参加  
(2000 年 8 月)

下：函館商工会議所主催「はこだて・  
未来・産業展」(2000 年 8 月、本  
学体育館にて)



左：子どもパソコン体験講座（未来祭、  
2000 年）

下：理科実験講座（未来祭、2005 年）



していましたが、2000 年が正式なデビューとなりました。10 月には初の学園祭「未来祭」を開催し、多くの地域住民の方々が大学を訪れました。

草創期にはまだ学生数が少なく、教育・研究活動の負荷がそれほど大きくなかったこともあり、教職員・学生が連携して、きわめて密度の濃い地域交流活動を展開しました。市民の方々が気軽に参加できる公開講座や情報デザイン系の作品展示会などが、教員たちの自主的活動として盛んに開催されました。情報系の大学であることから、コンピュータや工作を絡めた子ども向けの理科教室やコンピュータ入門講座なども、未来祭、夏休み、クリスマスなど、折々に行われてきました。こうした活動が地域連携活動の最初の一步となり、以降、毎年のように様々な企画が学内・学外で実施されており、多くの市民の方々と  
の交流・連携を深めてきました。

## 地域産学官連携への展開

一方、地域の産業や行政との産学官連携による地域貢献への期待も大きいものでありました。開学初年度には、産学連携委員会を学内に立ち上げるとともに、地域の産学交流団体「産学連携クリエイティブネットワーク」や、地域の高等教育機関の合同研究成果発表会「函館アカデミックフォーラム」へ参加し、地元の産学官との交流を積極的に図ってきました。

2001 年 7 月には、函館駅前の TMO ビル内に本学のサテライトオフィス（愛称 FUN BOX）を開設。約 4 年半の間、地元企業との産学連携や公開講座、他大学との共同研究の活動拠点等に利用されたのち、地域産学官連携の新たな拠点として、北海道大学函館キャンパス（水産学部・大学院）内に産学官交流プラザがオープンしたことなどを契機に、2006 年 3 月に閉所しました。

また開学当時、産学官連携を地域経済振興の柱とする政策が世界的な流れとなっており、日本でも全国各地域が国の大型助成事業をめぐる激しい競争を繰り広げていました。2003年度には、函館地域が文部科学省都市エリア産学官連携促進事業・一般型に採択され、北海道立工業技術センター、北海道大学大学院水産科学研究院、函館工業高等専門学校とともに、本学も地元の研究機関として大型連携事業への参画を果たします。同事業は「水産・海洋に特化したライフサイエンス領域」の研究開発をテーマとしており、ガゴメ昆布やイカをはじめとする地元水産・海洋資源の研究開発による新産業の振興を柱としたものです。

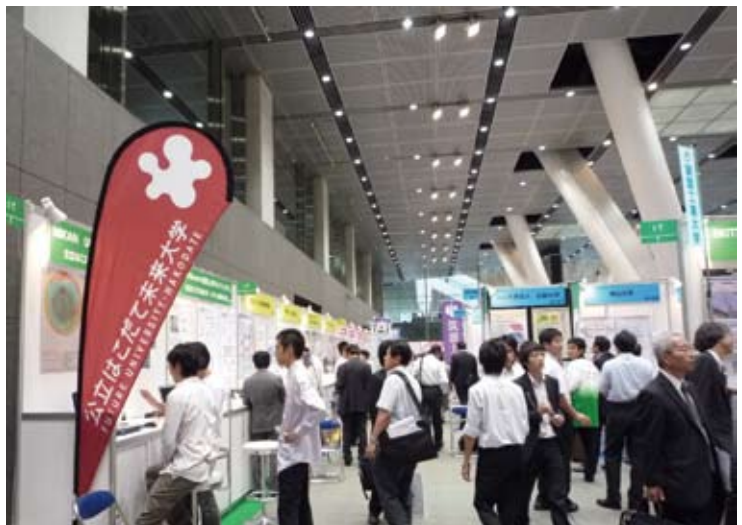
以降も函館地域はこのテーマを発展させながら、2006年度からは同事業の発展型に、2009年度からは文部科学省地域イノベーションクラスタープログラム・グローバル型に相次いで採択され、本学も研究機関として共同研究の一翼を担っています。一連の事業のなかで、本学は食材の測定技術や、水産物流通のトレーサビリティ、水産・海洋資源をセンシングするユビキタスブイなどの情報技術の研究開発を行ってきています。

2004年4月には、学内に共同研究センターを開設し、産学官連携や外部研究資金の獲得などを組織的に支援するための拠点としての活動をスタートしました。センター長（教員兼任）、複数教員から構成される運営委員会、そして事務局の職員スタッフがタッグを組んで、地域連携、産学官連携の推進、研究活動のPR、イベントの開催、道内外への展示会への研究成果の出展など、様々な活動に取り組んできました。当初、研究棟の一角にオフィスをかまえていましたが、2009年4月には外部からの訪問者がアクセスしやすい本部

棟・正面玄関入ってすぐのモールに面した一室に移転しています。

## 地域をフィールドとした 教育・研究の連携

地域に根ざす大学として、本学では地域をフィールドとした教育・研究活動を様々に展開してきています。特徴的なものとして、第1にすでに述べてきたとおり、3年次のプロジェクト学習の授業における地域連携が挙げられます。多くのプロジェクトで、地域の様々な人々の協力をいただき、現場における観察



大学研究成果の見本市「イノベーション・ジャパン」への出展（2008年9月、東京有楽町国際フォーラム）



共同研究センター主催の地域交流フォーラム（左：2008年10月、右：2010年2月）

や調査活動、そしてシステム情報科学にもとづく改善策の提案が、授業を通じて継続的に行われてきました。これらの活動は、学生の教育であると同時に、地域へ科学技術による恩恵をもたらすものとしても大きく機能してきました。学生には実践的な学びが、また教員には新しい研究の芽やさらなる連携の広がりが得られてきました。

第2に、本学教員が主導する地域連携活動として、学術・文化の啓発を柱としながら、科学技術振興、産業振興などを臨機応変に取り入れたプロジェクトが展開されてきている



函館圏地域デジタル・アーカイブ構築プロジェクト  
(特殊なスキャンニング装置)



はこだて国際科学祭 (2009年8月)

ことも特徴的です。主要なものだけでも、川嶋稔夫教授による函館圏地域デジタル・アーカイブ構築プロジェクト、三上貞芳教授、長野章教授による NPO 法人水産物トレーサビリティ研究会、松原仁教授によるはこだて観光情報学研究会の活動が挙げられます。いずれも、地域の産学官のキーパーソンや市民たちが、大学人との交流や共同事業への取り組みを通じて、新しい知識や方法論への自己啓発や学習を果たし、ひいては地域イノベーションを起こすための地域の基盤力を、長期的な視野で向上させていくことが目指されています。

例えば、函館圏地域デジタル・アーカイブ構築プロジェクトでは、地域の図書館や博物館の学芸員、貴重な文化財を保有する寺社やコレクター、歴史作家などの方々を巻き込み、地元に残っている歴史的な文献や美術史料を掘り起こし、一方ではその高精細デジタル化によるデータベースと検索・閲覧システムの構築を進め、他方では全国から専門家を招聘して地域にとってのアーカイブ編纂の文化的意味について考える市民講座シリーズ「文化と編纂」を開催するなど、地域連携―社会連携の複合による幅広いプロジェクトが展開されてきました。

さらに最近では、2008 年度に美馬のゆり教授、木村健一教授の主導により、地域の高等教育機関や行政を巻き込んでサイエンス・サポート函館という任意団体が立ち上げられ、はこだて国際科学祭、はこだて科学寺子屋、はこだて科学網という、地域科学技術コミュニケーションを推進するための複合的な事業が推進されています (JST 地域科学技術理解増進活動推進事業・地域ネットワーク支援に採択)。なかでも 2009 年 8 月に第 1 回が開催された「はこだて国際科学祭」は、地

域科学フェスティバルとして日本で最初の本格的な試みとしてスタートし、全国から注目を集めています。地域で科学技術コミュニケーションに取り組んできた方々はもちろん、海外からの一流ゲストの公演、大手企業のCSR（社会的責任）プログラムの参画など、国際科学祭という名にふさわしい広がりのあるフェスティバルが実現されています。

### 首都圏企業との連携

首都圏に本社を置く企業との連携も活発に行われています。教員それぞれの共同研究はもちろんのこと、プロジェクト学習においても、例えば携帯電話の未来のアプリケーション開発という課題に、大手携帯キャリア企業などの協力のもとで取り組み、最後は学生たちが協力企業の本社へ出向いて成果発表を行うといった、産学連携にもとづく実践的なIT教育も早くから行われています。

また、学生の就職という面での首都圏企業との連携は、ひときわ重要です。地方の大学では、地元の雇用が少ないため、卒業生は大都市圏へ就職を求めているかざるをえません。本学でも毎年の就職希望者の6～7割は、首都圏の企業へ就職していきます。開学以来、首都圏の大手企業に広く学生の就職実績を積んできたこと、卒業生が就職先でおおいに活躍していることから、企業の採用担当者間に「未来大ブランド」と言われる高い評判と信頼を短期間で形成してきました。首都圏企業との関係においても、単に卒業生を採用するだけの関係に留まらず、インターンシップを通じた連携、さらには、プロジェクト学習への連携、寄付講座への連携など、教育・研究を含めた多元的な社会連携へと広がりをみせているのが本学の特徴といえます。

2005年度から開設された東京サテライトオフィス（秋葉原）は、首都圏での教員の共同研究活動への支援とともに、首都圏企業への学生の就職活動を支援する拠点として、重要な役割を担っています。

### マリン・メディカル・モバイル—— 3つのMIT

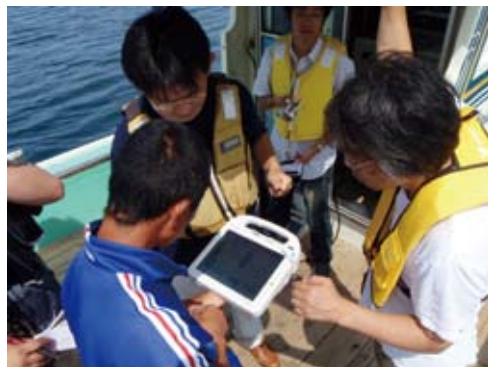
前述した地域産学官連携の大型事業への参画や、プロジェクト学習における地域の病院や首都圏企業との連携と並行して、本学が組織的に取り組んでいくべき研究開発テーマとして、マリンIT、メディカルIT、モバイルITという戦略的な領域が徐々に浮上し、2008年頃から「3つのMIT」と称して明確に打ち出しています。

マリンITは、水産・海洋分野における情報活用の研究です。先に挙げた水産物トレーサビリティの研究では、函館地域以外でも、青森県内の漁業協同組合との連携による十三湖でのシジミ漁での実証実験を行ってきたほか、北海道や沖縄でのユビキタスブイの研究、さらには和田雅昭准教授による留萌地域での漁業協同組合との長年の連携実績のもとで、他の教員も参画しながら、ホタテ漁やナマコ漁へのIT導入の研究が行われています。こうした水産・海洋分野のITに特化した戦略プロジェクトは、世界的にみても例のない独自の領域、函館発の新しい技術といえるでしょう。

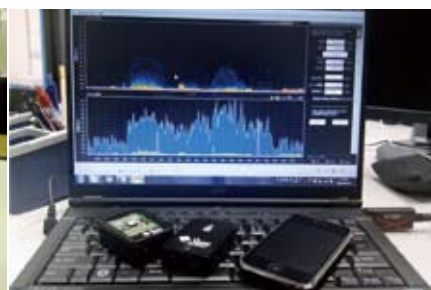
メディカルITは、少子高齢社会の地域医療サービスのIT化に取り組む研究開発です。これまで病院との連携によるプロジェクト学習で、看護・介護支援やリハビリ支援システム、患者と病院とのコミュニケーション・システムなどの調査・研究開発に取り組んできました。全国的にみても病院・クリニックの集積



マリン IT (左：留萌地域での漁協との共同研究風景／  
右：実験風景)



メディカル IT (左：病院での成果発表風景、右：開発成果例)



モバイル IT

が高く、地域の拠点病院都市として機能する函館市を格好のフィールドとして、21 世紀の医療サービス、医療・健康周辺の複合的な生活サービスのあるべき姿を追求する研究開発に取り組んでいます。

モバイル IT は、携帯端末をはじめとする今日の IT メディアの急速な進化のなかで、次世代の人間の移動と IT のあり方を探究する研究開発です。通信技術、セキュリティや暗号の技術など、基盤技術の研究はもちろん、地域のモバイル社会を想定した各種のアプリケーション、公共インフラストラクチャの研究開発に至るまで、幅広いテーマが想定されます。

いずれの領域においても、社会の実問題と深くかわりながら、「社会をデザインする」ための情報技術を開発し、ひいては地域社会に貢献していくことが、本学の戦略的研究開発における究極的な目標です。

21 世紀の都市のインフラストラクチャは、飛躍的な IT の発展によって大きく変容を遂げようとしています。現在、海外や国内の都市のあいだでは、次世代の都市形成へ向けた実証実験への取り組みによって、相互に競争し切磋琢磨しようとする動向があります。グローバル企業・IBM が世界中で展開する「スマートシティ」の実証実験プロジェクトはその代表的なものの 1 つです。本学では 2010 年 2 月に日本アイ・ビー・エム(株)と協定を結び、病院と公共交通をモバイル IT で賢く連携していく「スマートシティはこだて」のプロジェクトの推進にも着手しています。今後、函館地域の産学官民を巻き込みながら、共同研究、実証実験などを行っていく計画です。

こうした地域連携、社会連携の活動は、近年、大学の重要な責務となっていますが、少子化の続く厳しい経営環境のなか、大学として生き抜いていくためには、従来からの本務

である教育・研究活動もいっそうの向上を図っていかなければなりません。限られた人的資源のもとで、効率的な大学運営のための戦略的展開を追求していきます。

### 社会で研鑽を深める学生たち

最後に、学生たちの活躍が、本学の社会連携の大きな原動力となっていることをあらためて記しておきます。本学では大学院生はもとより、学部生にも学会発表やコンテストなどへの参加を奨励してきました。大学院生の活躍には目覚ましいものがあり、学会等の論文賞、プログラミングコンテストでの上位入賞など、数々の受賞を果たしてきました。学部生の中にも、大学院生顔負けの優秀な研究を行うものがみられます。北海道内の大学生を対象とする「ロボット・トライアスロン」では伝統的に好成績を挙げ、強豪校として名を馳せてきました。ACM 国際大学対抗プログ



未踏コース事業の作品例：「HIKARium: インタラクティブな空間演出を可能にする半球型インタフェースの提案」土屋幹、河瀬裕志、横道麻衣子（いずれも大学院博士前期課程1年；2009年度採択）

ラミングコンテストアジア地区予選には、開学した2000年から5年連続の出場を果たし、好成績を修めています。また、若手ITクリエイター育成の登竜門的なプログラムとして知られる独立行政法人情報処理推進機構（IPA）の「未踏ユース（正式名称：未踏IT人材発掘・育成事業）」では、事業初年度の2002年以降、毎年のように学生が提案した開発事業が支援対象に選ばれています。

システム情報科学を学ぶ学生たちは、ただ教室で講義を受け、机やコンピュータに向かって勉強すれば事足りるわけではありません。学外での学会や研究会、コンテスト、あるいは海外留学などの自己研鑽の場にみずから飛び込み、様々な挑戦の機会を得ようとする学生たちの進取の精神も、本学が誇るものです。



「ロボット・トライアスロン」での活躍



イカボ3号

Part 3 Fun's Generation

# 卒業生の日で 振り返る 「大学創成期」



## 座 談 会

公立はこだて未来大学  
卒業生《1期生+2期生》

左から古川、河野、岡田、原田、佐藤、石神の皆さん  
(東京サテライトオフィスにて／2010年4月4日)

- |      |        |                              |
|------|--------|------------------------------|
| 司 会： | 河野 真吾  | 1期生・情報アーキテクチャ学科卒             |
| 出席者： | 岡田 恵利子 | 1期生・情報アーキテクチャ学科卒             |
|      | 佐藤 崇正  | 1期生・情報アーキテクチャ学科卒・大学院博士前期課程修了 |
|      | 原田 諭   | 1期生・複雑系科学科卒                  |
|      | 石神 圭太  | 2期生・情報アーキテクチャ学科卒             |
|      | 古川 未来  | 2期生・複雑系科学科卒・大学院博士前期課程修了      |

## なぜ未来大だったのか？

河野●今日は1期生、2期生の代表として皆さんに集まってもらいました。大学へ入ったとき、「自分たちで大学を創っていかなくちゃならない」という感覚というのを、みんなものすごく強く持っていたと思うんですが。

岡田●出身地の札幌で未来大の説明会があって、美馬（義亮）先生が一生懸命説明しておられるのを聞いて、すごくおもしろそうな大学だと思いました。漠然とデザイン系で進学を考えていたんですが、「パンフレットにデザインって書いてあるし、しかも公立だし、こりゃあいいや」と（笑）。

親にはなにも札幌から出なくても、専門学校でもいいじゃないと言われ、高校の先生には「なんだ、その大学は。おかしい大学名だし、実績もないし」と反対されたものの、「絶対おもしろそうだし、絶対ここへ行く！ここしかない!」と妙に盛り上がり、まわりを説得しました。最終的には母もすごく後押ししてくれて、入学を決めました。

石神●僕の場合は、ビデオを撮ったり、テレビ番組を作ったりといった映像系のことに興味がありました。でも映像系の学部はとても少なくて、地方にはほとんどない。そんな時に高校の先生から「未来大なら何でもできそうだよ」という話を聞いて、

関心を持ちました。当時はITバブルの時期でもあって、少なくともITができないと、映像にかぎらず何をやるにしてもついていけない、ビジネスには絶対必要なものになるだろうと考えて、未来大を選んだという感じです。

古川●私は函館市役所で大学のパンフレットをもらって、「複雑系」という学科があるのを見つけて目を引かれました。もともと化学系志望だったんですが、「複雑系のエッセンスを持って、化学をやるのはとてもいいんじゃないかな」と思いついたんです。高安（美佐子）先生（現在は東京工業大学）の『フラクタルってなんだろう』という本を高校の図書館で取り寄せてもらって、ガッツリ読んで、「未来大、受けます!ここに行きます!」と、周囲に宣言しました。

佐藤●僕は函館高専を卒業してから編入したので、みんなより少し遅れて、1期生が3年になったところへ合流しました。もちろん地元だから開学の話はどんどん伝わってきて、「未来大が出来たぞ。建物もすごくいいぞ」と聞いて、じゃあ見に行ってみようかと、友達と一緒にチャリンコで大学までの坂を必死に登って行きましたね（笑）。キャンパスに入って行って、その辺の学生らしき人に「何やってるの?」と声をかけてみて、「ロボット作ってるんだあ」みたいな立ち話をしたりして

### 第1回未来祭 (2000年10月)



(笑)。じつはその2年後、未来大に編入した時に、そのロボット作ってた学生の坂本(大介)と一緒に研究することになるんですけどね(笑)。

**河野**●そういえば編入してきてすぐに、坂本さんと2人で「未踏ユース」(P46 参照)のプロジェクトとか、やってたよねえ。

**佐藤**●そう。「ああ、あのときの」みたいな感じで、坂本くんとはすぐに話をして仲良くなって(笑)。

未来大の開学前に大学を紹介するイベントが函館で開催されて、その時に配られたチラシに、「化けましょう」という学長メッセージが書いてあるのが印象的でした。あとは開学直後、新校舎でのロボカップのイベント(第3回ロボカップジャパンオープン)も見に行きました。

もともと高専から大学に編入するつもりだったので、どこの大学に行くか、未来大も含めていろいろ考えました。最終的には高専の先生が「人工知能とかロボットとかやりたいんだったら、未来大はいいよ。とにかく先生方が素晴らしいよ」と勧めてくれたのが、編入の最後の一押しとなりました。

## 未来祭から大門祭へ

**河野**●入学して、実際みんなの最初のフィーリング、どんな感じだったのかな。

**岡田**●ほんとと人はいないし(笑)、校舎はきれいだしで、もう超快適だった。

**河野**●大学の空間それ自体、ほかと全然違う。ドーンと吹き抜けでスケールが大きかったからね。スペースだけじゃなくて、伊東学長の「化けましょう」とか、3Cのスローガン(Challenge, Communicate, Create)とか、もうほかの大学とはまったくコンセプトが違っていて驚くことばかり。「何? この自由さは?」と。

**原田**●確かに自由だったね。

**岡田**●最初はほんとにルールがまったくなくて、すごく特殊な環境だったと思う。今まで感じたことがない開放感というか、自分で動かないと、何もできない。

**古川**●2期生の私にとっても、とても自由だった。

**岡田**●とにかく寝る間も惜しんで、思い切り遊んだし、勉強もしたし、課外活動もいろいろやったし。

**原田**●確かに寝てなかったね(笑)。1年目、最初の大学祭を始めなきゃと思って、「未来祭、やりませんか?」ってみんなにメールを流したよ。

**河野**●未来祭って、大学の事務局からそろそろやりましょうとか言われたのではなかった?

**岡田**●いや、そうじゃないよね。

**原田**●取りあえず人は少ないし、5月頃になると、だいたい学生同士みんな顔見知りになって。それ



### 河野真吾 (こうの・しんご)

2004年情報アーキテクチャ学科卒。新日鉄ソリューションズ株式会社勤務。産業ソリューション事業部のSEとして生産管理システムの開発に携わる。2009年から人事部教育グループに異動し、現在は新入社員研修はじめ、社内研修の企画・運営を担当している。

でさらなる新しい出会いを求めて(笑)、函館市内のほかの大学の学生たちと一緒に何かやりたいなと思って、「何かやりませんか」といろんな人たちに持ちかけたりしていた。で、事務局に「何か支援してもらえますか?」と相談してみたところ、「そういえば大学祭、やらなきゃね」という話になって、第1回の未来祭の実行委員長を務めることになったわけです。

未来祭を始めたことはとても楽しかったし良かったんだけど、そもそも僕ら言い出しっぱのグループは、他大学と合同学園祭をやったかったので、2年目から「大門祭」(P17 参照)を始めました。

**岡田**●そうそう。未来祭を立ち上げて、1年目は1年目で盛り上がったし、2年目からは大門祭が加わって、盛り上がっていった、すごく面白い流れだったなあと思う。



## 型にはまらず、やってみる

**岡田**●私の場合、大学へ入ってすぐに、いろんな先生たちと仲良くなる機会が多かったです。それで先生方が、「NHKからこんな仕事の依頼があるけど、やってみない?」とか、「市役所がこんな助成事業を公募しているけど、出してみたら?」とか、いろんな情報をくれる。うまく乗せられて、1年生の時から授業以外にいろんなことをやるチャンスに恵まれましたね。

函館市役所に提案書を出しに行ったら、「ここ書式違うし、そこのパソコン使っていないから書き直して」とか言われて、市役所のデスクに座り込んで黙々と企画書を書き直しながら、「いったい私、何やってんだろうか?」って、内心つぶやいていた(笑)。そういう経験がまさに今、違う年代の人や

## 第1回大門祭 (2001年8月)

右下：1期生仙石智義さん提供  
他3点：函館新聞社提供



立場の違う人たちとも円滑に、プロジェクトを動かすのにすごく役立っているんじゃないかと…。

**河野**●なんかそれ、すごくよく分かる。たぶん未来大生って、最初の一步を踏み出すフットワークがものすごく軽い。

**岡田**●会社の会議って、机上の空論みたいになって空回りするときがあるじゃないですか。そのときに「まあそう言ってないで、取りあえず今、この場で電話して、確認してみませんか？」なんてことを、平気で言えちゃう。おそろおそろ電話してみたら、何時間も会議室で議論していたのに、それまでの議論がまるで嘘のようにあっさり事が進んでしまって、みんなポカーンとしてたりするわけです（笑）。分からないこと、読めないことがあっても、とにかく動いてみるという姿勢は、未来大で学びましたね。

**河野**●1期生がやりたい放題やってるところに、2期生が入ってきてどうだった？

**古川**●みんな自由にやっているなと思いましたね。1期生が自主的にゲノムの勉強会を立ち上げていて、それに参加させてもらったのが良かったです。私なんか全然ダメダメでしたけど、曲がりなりにも分厚い『分子細胞生物学』の教科書を一生懸命読んでました。

**石神**●古川さんはオープンキャンパスで、2期生

を代表して高校生相手にになにか話していたよね。

**古川**●そう、偉そうに「未来大では何でもできますよ」とか言って、すごく恥ずかしかったんだけど（笑）。「ほんとに自分でやりたいと思えば、どんどん提案して、周りの人を引き込んでできます。ぜひ皆さんにも未来大に入ってほしいです」とかね。それで翌年、その話に感動して入学しましたって言ってくれた新入生と話すことができて（笑）、ちょっとうれしかったです。

## Have fun の精神で つらいことも楽しく

**河野**●結構、未来大ってきつところもあったじゃない。みんな徹夜しながら、課題をやるとか。すごく大変なんだけれども、基本的にはみんな楽しそうだった。なんか不思議だよね…。

**石神**●徹夜どころか、2晩目、3晩目とか…（笑）。

**佐藤**●確かにそうだね。きつかったなあ。

**原田**●それがあんまり強制的じゃなかったから、逆に自分から自発的にこうしなければっていうモチベーションに変わっていったような気がする。

**河野**●それはあるね。「fun」って未来大学の略称だけれど、英語でいうと楽しいという意味で、どこ

かで、なんかつらいことでも、楽しい部分を見いだして、楽しいことに変換してやれるところがあったという気がする。「Have fun」っていう精神が、未来大生にはあったんじゃないかな。その精神は、仕事している今でも生きている気がします。

**岡田**●自分自身では結構大変だなあ辛いなあと思って仕事している時でも、「楽しそうに仕事してるね」と言われることがあります。そういう意味では、大変な状況の時にほかの人にも楽しさを分けてあげられてるのかな、そんな風に仕事ができているのはうれしいなと思ったりします。

**河野**●いや、未来大生、そういう人が多いと思う。ほんとに。

**原田**●なんかこう、何かを成し遂げたい、実現したいものってあるじゃないですか。それが何であっても、確実に自分の期待するゴールまではやり遂げなきゃいけないっていうのがあって、そう考えると、土曜日も日曜日も、朝も夜も関係ないみたいな（笑）。で、その志を持っている人はとことん巻き込んで一緒にやりました。

**河野**●すごいな。

**原田**●開学当時から振り返るとね、じつはいちばん楽しかったのは、「ネイパル」での新入生歓迎合宿。もうあれはめっちゃめっちゃ楽しかった。

**岡田**●うわあ、「ネイパル」懐かしい！（笑）あれも原田くんが言い出したんだっけ。

**原田**●そう（笑）。

**古川**●それって、新入生と先輩と一緒に泊まりに行った合宿でしたよね。

**河野**●大沼の「ネイパル森」（北海道立森少年自然の家）というところへみんなで行って…。

**原田**●そうそう。新入生のリストを眺めながら、どういう企画にしたらおもしろいものができるかなって、喫茶店で5時間くらいディスカッションしたりして、結構楽しかったよね。

**古川**●私、2期生で参加しましたけれど、楽しかったけど結構つらかった。「新入生だから歓迎されているはずなのに、なんで私、一生懸命、画用紙に書き込んだり、なんか作ったりしているんだろう？」と思っていた記憶が（笑）。

**岡田**●確かグループごとに分かれて「未来」というテーマで何かまとめてプレゼンテーションしてもらったんだよね。プレゼンの形態はなんでもいいということで、ビデオを使って環境問題についてプレゼンしたグループもありました。いきなり新入生に無茶させたよね。

**原田**●根性系のプロジェクトだったからねえ（笑）。

**古川**●そう。あれはまさに根性系でした（笑）。

**岡田**●ネイパルの手伝いをしていたときは、バイトとの掛け持ちが超きつかった。夜、バイトが終わって、そのままネイパルに行って、ネイパルで泊



## 岡田(佐藤) 恵利子

(おかだ=さと・えりこ)

2004年情報アーキテクチャ学科卒。キヤノン株式会社勤務。同社総合デザインセンターにて、近未来を想定した新機能サービスや新規事業などのデザインコンセプト開発・提案可視化業務に携わった後、2010年4月よりデジタルカメラ、ビデオカメラなどコンシューマ現行製品のユーザインタフェースデザイン業務を行っている。

まっって、そのまままた朝一でバイトに行って…（笑）。

**原田**●先輩たちも、1年生も、みんな必死になって、徹夜でやってた。

**河野**●そういう「あきらめない精神」というか、与えられたものはきちんとやらなきゃっていう精神は、未来大で培ったよね。だから社会に出たとき、「社会人になったから責任持ってやらなきゃ」とか、そういうマインドの切り換えは必要なかった気がする。

**古川**●どっちかっていうと、学生時代のほうが根性あったかもしれない（笑）。

## 未来大で学んだこととは？

**河野**●未来大の講義を振り返ってどうでしたか。今の仕事に生かせていますか。

### ネイパル森 (2001年4月)

2期生への新入生オリエンテーション  
を兼ねた新歓合宿



**佐藤崇正**（さとう・たかまさ）

2004 年情報アーキテクチャ学科卒・2006 年大学院（知能情報科学領域）博士前期課程修了。ソニー株式会社勤務。個人向け携帯情報端末やスマートフォンなどのソフトウェア開発に携わった後、2010 年、R&D 部門へ異動、新規技術開発を行っている。



**佐藤**●未来大の講義って、何を取っても役に立たないものはないという印象を持っていたし、実際そうだったと思います。僕の場合、未来大初の編入だったこともあって、大学側の仕組みもちゃんと出来ていなかった。「4 年へ進級するには、それまでの必修単位をすべて取得していなければならない」というルールが編入生にもそのまま適用されて、3 年生の 1 年間で 1～2 年次の教養科目、必修科目を全部取る必要があったんです。本当に時間が足りなくて「あの講義もこっちの講義も取りたいのに、取り切れないぞ」って感じでしたね。

**河野**●僕が人とちょっと違っていたのは、在学中に 3 回もインターンを経験したことかな。1 回目大学 1 年生の時に東京のベンチャー企業で約 1 ヶ月で 400 時間も働きました。いや、ほんとに。まあ自分で好きで行ったわけだけど（笑）。2 回目 3 年生の時に千葉の IT 企業で、4 年生の時に、現在勤務している新日鉄ソリューションズの研究センターへ行きました。その頃「大学でプログラミングやってます」とか言ってたものだから、なんだか鳴り物入りで入社しちゃって、「おまえ、すごいできるんだろうな」と言われてたのに、社会人に比べたら口ほどにもない…（笑）。

その後、SE（システムエンジニア）の仕事に就いたけれども、ここで未来大の本領が発揮されました。例えば情報デザイン系の講義で HTML 言語とかも読めるようになっていたから、社内でウェブ構築の話題になってもよく理解することができし…。未来大の教育を振り返ると、「プログラマーはプログラミングだけやればいい」「デザイナーはデザインだけであればいい」という感じではまったくなかったね。分野を超えて幅広く教えてくれたのも、一時期は不安に思っていた時もあったけれど、社会人になってみてそれはすごく良かったなと思いますね。

**古川**●それは私もすごく良かったと思う。

**岡田**●卒業してから、キャノンのデザインセンターというところにずっと勤めていて、まわりはいわゆる美大出身の人が多いんですが、情報系がバツ

クグラウンドのデザイナーは少なく、未来大で情報系のことも学んだことはすごく強みになっています。そしてもっと勉強しておけばよかったなと…。Linux の講義もちゃんと取っておけばよかったと（笑）、後悔してます。仕事って、その専門を突き詰めることも大事だけど、自分の専門外の知識も幅広く持つって、ものすごく重要だなと思う。最近、そのことを特に感じています。だから大学時代に幅広い知識が吸収できる環境だったのは本当に良かったと思います。

私が入学前に漠然と思い描いていた「デザイン」というのは今でいう工業デザインのようなイメージなんだけれども、いざ入学してみたら、未来大ではもっと広い範囲のことをデザインとして扱っているのに驚きました。さらにその中心には、情報そのものをデザインするという「情報デザイン」というまったく未知なるものがあって、「え、何ですか、それは？」と（笑）。すべてがおもしろくて、どんどんのめり込んでいきましたね。

**古川**●私は、複雑系科学科から大学院のメディアデザイン領域へ進んだんですけど、一見メディアデザインとは関係なさそうな、複雑系の最高難度の科目も取りつつ、デザインもやっていたので、多様な考え方を学べたと思います。デザイン系の教員や学生と、複雑系の教員や学生とでは、やっぱり考え方、ものの見方が全然違うんですね。その両方を知って、「でも複雑系の人にはもっとこうなってほしいし、デザインの人にはこうなってほしいな」ということを、どちらにも言える見方ができたというのは、ちょっとうれしかったかな（笑）。

複雑系って、おもしろい研究をしている先生がたくさんいらっちゃって、それを知って社会へ出て、仕事を通じて新しいトレンドと出会う中で、「もしかすると、複雑系でこういうシステムが実現できるかな、やりたいな」とって、いろいろ考えたりするのが楽しいです。複雑系の学問自体が社会で十分に生かされているとは、まだ思っていないけれども、10 年後、20 年後のコンセプトを練るためには、そういう知識を持っていて、柔軟に発想していくための材料としては大きな財産だと思っています。

**佐藤**●僕も大学院に進んで、学部の研究から引き続き鈴木恵二先生（現在は北海道大学）の研究室で飛行船の自律飛行に関する研究をやっていました。

**河野**●飛行船、懐かしいね（笑）。

**全員**●懐かしい！

**佐藤**●夜な夜なスタジオで飛行船を飛ばしていましたね。結構プロペラの回転音が大きくて、スタジオで自習している学生に迷惑掛けてしまったかなと反省しています（笑）。出来るだけ人のいない深夜に実験するにはしていたんだけど、お

かげで当時は完全に夜型人間になっていた。

ロボットって、いじっているといろんな知識が一度に身に付く。機械的な部分はすぐに壊れるので自分で直したり、電子回路を設計してハンダ付けして、ドライバ（プログラム）を書いて、自律飛行の理論を考えて実装して——学生時代にやっていたこと、すべて仕事に役立っていますよ。さすがにハンダごてを握ることは減多にないですが。

今は新しい技術を考え創り出す仕事をしているので、それがすでにどこかでやられている技術かどうかがすごく重要になる。大学でいろんなことをしていたおかげで、「このあたり調べたら類似技術が出てきそう」という勘がよく働いたり、あまり知らない方面の技術でも何となく想像がついたり…、そういうことはほとんど未来大で学んでいたんだと改めて思います。

**石神** ●僕も未来大で学んだこと、仕事に全部生きていると思いますね。

結果的に今は、当初目指していた映像制作ではないけれども、映像も扱う映画宣伝の仕事に就いているので、道としては間違っていないかたんじゃないかと思います。

映画の宣伝って、いろんなところとタイアップしたりして、使えるものは何でも使っていく。以前もある映画に関連して、「量子ワープ」に絡めて理化学研究所の素粒子系の研究プロジェクトとタイアップする企画があって、理系出身ということだけでなぜかそこに組み込まれたこともありました（笑）。基本的に非常に無茶が多い業界なんですけど、良いアイデアであれば即採用される。最終的には自分からアイデアを出して持ち込んでいける



**古川未来**（ふるかわ・みき）

2005年複雑系科学科卒・2007年大学院（メディアデザイン領域）博士前期課程修了。パナソニック SN ソフトウェア株式会社勤務。北海道内の公共インフラを監視する Web システム・インターフェース変換ソフトの開発に携わる。

行動力が必要とされる仕事なんですね。

プロジェクト学習をはじめとして、未来大では、誰かが何かを用意してくれるんじゃなくて、自分でゼロから考えて必要なものを収集することが身についたっていうのかな、そのために何でも自由にできる環境を未来大に与えてもらったことが、今の仕事に生きている。そういう気がしています。

**河野** ●あとね、ひそかに未来大のコミュニケーションの講義、仕事する上ですごく役に立ってます。ネイティブの人とあんなに長い期間、定期的に英語で話せる機会というのは、ふつうの大学ではあるのかなあ…。外国人講師の先生方と知り合いになると、講師宅のパーティーに遊びに行ったり、力仕事に駆り出されたり（笑）と、結局在学中なんだかんだと付き合いが続いていましたね。

というのも会社に入ってから、海外向けのパッケージ・ソフトの仕事をやっていて、取引先からの問い合わせなどはすべて英語。いきなり電話がかかってきて「Hello. Are you Shingo?」とか言わ

## 学生生活



左：2期生を迎える入学式の準備風景／右上：講義（芸術論）でのフィールドワーク／右下：最初のプロジェクト学習成果発表会にて（2点とも岡田恵利子さん提供）

## 原田 諭 (はらだ・さとる)

2004 年複雑系科学科卒。株式会社ゼロイン勤務。企業内コミュニケーションの活性化のためのイベント、ミーティング、コミュニケーションツールのプランニングに携わる。2010 年から、企画グループに異動し、新商品の企画・開発・営業推進に取り組む。



れて、とりえず「Yes, I am Shingo.」と、動揺せずに一応は応答できると（笑）。

アメリカの技術者ともすごく仲良くなって、現地時間に合わせて仕事するから、夜中に英語でメッセージャーでやり取りしながら、リモートデスクトップで同じ画面を見て、いろいろ話し合うんだよね。そうすると、やっぱり技術とか仕事の話だけじゃなくて、お互い「いろいろ面倒かけて申し訳ないね」とか、「ジャパンは夜遅いって知ってるぜ、お疲れ様」みたいな、人間的なやり取りがあって（笑）。そういう気遣いができるか、できないか、生身の人間がお互いの立場を理解し合いながら、いいものをつくっていけるかっていう、本当の意味でのコミュニケーションという点で、未来大で学んだこ

とって大きかったかなと思いましたね。

## 就職活動もゼロからの頑張り

河野●1 期生、2 期生というのは、先輩の実績もない中でどうやって就職活動を乗り越えていったのかな。そのときに、どんな経験が役に立ったのかな。まあ 1 期生、2 期生は、「俺が、俺が」「私が、私が」っていう、放っておいてもどこにでも飛び込んで行っちゃうような人が多かったとは思うんだけど…（笑）。

古川●そういう人、多かった。まわりに謙虚な人は誰もいなかったと思う（笑）。就職面接は、私は最初、「自分が、自分が」を出し過ぎて、頑張りすぎて失敗しちゃったんです。札幌でことごとく落ちちゃって、あれ、これはやばいぞとなったときに東京に出て行って、「ちょっと丸くなって、受けなきゃダメだな」ってやっとわかってきた頃に、ようやく決まった（笑）。

でも結局は、やってきた研究とか、自分のオリジナリティとか哲学とかを話して、それを評価してもらって通ったことは、うん、いい思い出かな。

岡田●1 期のときは就職活動、みんなともかく無我夢中だったんじゃないかな。

## 研究風景



左 2 点：マインドストームのプログラム実習（2001）

中：飛行船自律飛行実験（佐藤崇正さん提供）

右 2 点：ACM 国際大学対抗プログラミングコンテストへの準備風景（2002）

河野●誰にも聞けないしね。

岡田●私はデザイン職とSE 職と、両方同時に受けていったんだけど、どんな手段でもいいから、とりあえず情報収集“命”みたいな感じでしたね(笑)。新しい大学だから入ってくる情報も少ないので、就活中に知り合った美大生の学生に、その美大に来ているデザイン系採用情報の資料をコピーさせてもらったり…。

それから、大学のことも知ってもらわないといけないでしょう。未来大のパンフレットをコピーして、「すごくおもしろい大学なんです。ここで私は学びました」みたいなことを書いて、エントリーシートと一緒に入れたりしてね。やれることはすべてやるという勢いでしたね。

石神●確かに、就職活動プラス大学紹介をしなきゃいけないっていうのはありましたね。

岡田●逆にそれは、私たちの強みだったかなとも思います。

古川●複雑系科学科の人たちはもっと困ってたと思う。「複雑系って何なのか」を説明しなきゃいけないでしょ。私も、どう説明するかをしっかり考えてから面接行きましたよ。

河野●そういう頑張りがあるから、今の就職では「未来大ブランド」と言われるところにまで、知名度が上がってきているんだと思う。

## 函館という街の心地いい サイズ感

岡田●今振り返ってみて思うのは、私たち学生が自由奔放にいろいろできたのは、大学の雰囲気もあるけれど、函館という街の地域性もすごく良かったんだなと思います。街のサイズがちょうど心地良い感じで。例えば、さっき言っていた市役所へ出す企画書を学生が書かせてもらうなんて、たぶん函館くらいの街じゃなければ無理でしょう。すべて見渡せちゃうような田舎な感じのところもありつつ、都市の主要な施設、裁判所とか放送局とか病院とかデパートとか、全部コンパクトに揃っているんですよね。

河野●あ、確かにそうだね。競馬場も競輪場もあるしね。

佐藤●そう、刑務所もあるしね。自転車で行ける範囲にワンセット全部ある。それは大事なことだと思う。

岡田●ほんとに小さい町の中に全部入っているって、すごいと思う。旅行好きで、全国各地回ってみてきたけれど、そういう意味では函館って、ほんとに珍しい街だになって、すごく思います。

古川●函館の人って、そのことにじつはあんまり



石神圭太 (いしがみ・けいた)

2005 年情報アーキテクチャ学科卒。株式会社デジタルプラス勤務。WEB を中心とした映画宣伝業務・公式サイト作成などを手がける。主だった作品は「アバター」「ダヴィンチ・コード」「24-TWENTY FOUR-」など。

気づいてないですね。私も外に出てから気づいた。

河野●そのコンパクトな街の中で、何をやるにしても、未来大は最初から目立ってたね。

古川●そうそう。タクシーの運転手さんにまで「未来大生なんだ。期待してるから、がんばってね」なんて言われて(笑)。

石神●そういうこと、よくありましたね。

古川●函館の人にとっては、とても期待が大きい大学なんだと、学生ながらひしひしと感じられましたね。

岡田●私たち(岡田=佐藤)じつは夫婦なんですけど、2人とも東京で働いていながら、結婚式を函館で挙げました。木村(健一)先生が感動してくださって、結婚式の翌日にたまたま市長と会談した時に、「卒業生が東京からわざわざ戻ってきてくれて、しかも東京から人をたくさん呼んでくれて、こんなに函館にお金を落としてくれたんです」と、結婚式の写真まで見せながら(笑)話してくださいました。あとから聞いて「ええ〜!」みたいな。

河野●僕も招んでいただいたけれど、温かかったよね、結婚式。

岡田●ウェディングプランナーさんも、「うわあ、おふたりとも未来大の卒業生なんですか」って、すごく熱を入れてやってくださって、とてもうれしかったです。私たちの後にも、未来大の卒業生同士が函館で結婚式というのは、何組かいるらしいです。

河野●やっぱり学生たち、函館にはすごく感謝しているし、卒業生として函館にかかわっていきたいという気持ちは、みんな持っていると思います。将来的に戻ってきて会社つくるとか、できるというよね。

岡田●そう。卒業生が何かのかたちで函館に戻ってきたり、何かしら函館に戻っていく、還元できるサイクルがこれからできていくと、すごくいいなと思う。

佐藤●卒業生が外に出ていくのは、全然悪いこと

じゃないしね。全国に出ていくことは、函館や未来大の知名度が上がっていくわけだしね。

**古川**●今、東京の本社から札幌へ赴任していて、公共インフラシステムの仕事とかしているんですけど、ときどき函館に関係する業務を手がけたり、出張に来たりする機会があると、やっぱりうれしいです。例えば今度、新幹線が函館に延伸してきますけれど、何か自分もかかわれたらうれしいな、とか。ちょっとわくわくしています。

## みなさん、化けましたか？

**河野**●最後に、大学時代からこれまで振り返って、どう化けましたか、皆さん（笑）。僕は、未来大での4年間でいちばん変わったことは、ものすごく前向きな人間、スーパーポジティブになったことですね（笑）。

**原田**●僕の場合は、キーワードは「リーダーシップ」です。大学で大小様々な取り組みのリーダーをする経験を多く与えてもらって、人と一緒にプロジェクトを進める中で、リーダーシップをとることの素養を、数多く学ぶことができたのは、自分にとって大きかったなと思っています。

卒業してからは、会社の中での仕事のリーダーシップというものを、ある程度つかめてきたところですね。これからさらに、会社の外に対して、どうリーダーシップを取っていけるかつかんでいきたいと思っているところです。

**佐藤**●僕は高専から編入した時には、まだ「自分の能力でできる範囲はここまで」という、自分で自分の殻を作っていたような気がしています。でも、大学に入ってみたら、周りにいる同じ年代の学生には、殻なんか全然なくて、いろんなことに挑戦している。自分もやろうと思えば、できるんじゃないのかって気づいて、自分の殻を破れたのが、

いちばん変わったところだと思います。

**岡田**●私は高校のときは、ごくごくふつうで、率先してリーダーシップを発揮するほうでもなかったし、仲良く友だちと遊んで、勉強もしてという感じでした。それが未来大で一皮むけたとすれば、たぶん1つは、自分がやりたい方向がちゃんと見えてきたことと、それからもう1つは、皆でプロジェクトを組むことで、自分だけじゃできないことが成し遂げられる、ということを学んだことですね。

仕事をしていく上で、年代のまったく違う人たち、立場の違う人たちとも協調性を保ってひとつのプロジェクトを成し遂げていくには、人の心のつかみ方ってすごく大事だと思うんです。さらに私の場合、社長とか事業部長といった経営層の人たちに、会社の5年後、10年後のコンセプトをプレゼンする機会が多い部署にいたので、そういう人たちにいかに共感してもらうか、伝えることもとても重要なんです。まだまだ学んでいる最中で、「化ける」ところまでは到底行けてないんですが、そういうコミュニケーションの力を積み上げていけたらいいなと思っています。

**古川**●大学に行って変わったのは、講義を受けるときの姿勢ですね。講義の時に得た知識だけでは終わらないというか、むしろそれは学びの「始まり」だということがわかった。講義の後に、先生に「この理論だと、まだここが足りないですよ」といった質問を振ってみると、「そうなんだよ。じつはまだ全然できていないんだ。だから今、こういう研究をしている」と話が発展していったりするのがおもしろい。

やっぱり、今ある知識がまだ発展途中にあることを常に認識するとか、それに対して疑問を持つ姿勢とかが、未来大に来て自分が変わったところだなと強く思います。その延長で今、会社でも、「何が足りないのか、どうすればもっと良くなるんだろうか」という積極的な姿勢で仕事に取り組むことができているのかなと感じています。

**石神**●僕は、今ようやく化ける準備ができたところかなと。大学の4年間は自分なりに頑張って、すべてその後の道に進むための土台にしたという自信はあります。要は、これから化けるための準備をしている期間だなというのは、ずっと感じていました。

今、好きな仕事について、自分から企画を考えて仕掛けていく中で、「ああ、少しずつ化けてきているのかな」とようやく感じ始めたところでしょうか。

**河野**●今日はたまたま我々が卒業生代表というかたちで話をしたけれど、未来大生のこのネットワークをこれからも大切にして、後輩たちにも1期生、2期生の経験を伝えていきたいですね。

